
もしも俺が...

一般構造用圧延鋼材

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もしも俺が…

【Nコード】

N5173B

【作者名】

一般構造用圧延鋼材

【あらすじ】

この作品はきつとフィクションです。実在の人物・団体・事件とはあんまり関係ないと思い込んだ上で読んでください。

く序章く

「はい、お届けもん」

いきなり背後から声をかけられたM氏はびつくりして振り向いた。
（M氏とは決してイニシャルトークではなく、それがこいつのあだ名だからだ。本名は松本ナントカ。松本のMをとってM氏。断じてこいつが被虐愛好者だからではないのであしからず）「ったくよお、なんだって俺がこんなことしなきゃなんねえさ」

自分の行動をばやきつつも頼まれたもん（彼女からのラブレター）をしっかりと渡す。

（ちなみに俺は郵便屋さんでもなければ恋のキューピッドでもない。佐々木ホニャララ、15歳。つい先日高校の入学式を終えたばかりだ。）

「ごめんね、いつも」

俺の羨望半分、皮肉半分の発言に律儀に礼を言うM氏。こういう真面目なやつなんだよ、こいつは。

「いいけどよ、早くそれ読みに行こうぜ」

「あ、うん」

返事をしてM氏は席から立った。

とまあ二人して男子便所の個室に入って手紙を読んでもるわけだが、無論俺がM氏に届けたラブレターはM氏に宛てたものであり俺が読むものではない。

そんな一般常識は俺もわかっているのだ。ではなぜ読むかというと、M氏が許可したからである。というか、M氏は俺が冗談半分で言ったことを真に受けてしまい『ラブレターを届けてやる代わりに手紙を読ませる』ことにしたのだ。もちろん木下には秘密で。

（ここで初めて出る名前があるわけだが、だいたいの方は察したであろう。木下。、ラブレターの送り主でありM氏の彼女である。）

なんだか俺が悪い気がしてくるが気にしていたら世の中やっていけない。

まずM氏が読んで、さしつかえなければ次に俺が読む。内容はだいたい放課後どうしましょ、とかこの前は楽しかったね、とかまあそんなものである。

「毎度毎度こんなこと手紙に書くなら携帯買えよ。木下は持つてるんだろ？」

「うん。そうなんだけど…今んとこなくても困ってないし、いいかなあって」

そう、今のところ困るのは毎度配達している俺くらいのものだ。

意外にも友達想いな俺は文句を言わないが…ああ優しいな、俺。

「第1章・健康で健全な男子」

「んじゃ… E組の山口さんは？」

「ん… A - (マイナス) かな。 M氏はどうよ？」

「え、俺はいいよう」

「んだよ、彼女いるからって余裕ぶりやがって」

「そんなんじゃないけど… じゃあ B +」

「厳しめだね」

いきなりよくわからない会話から入るが、まあ全国の健康な男子高校生諸君、もしくはそれなりに青春時代を謳歌した方々には俺たちちがやっていることを理解してもらえるだろう。

そう、女子のランク付けだ。女性読者の皆様には申し訳ないが、悲しいかなこれが『男』という生き物の習性なのだ。

「結構この高校はレベル高いよね」

などとのたまっているこいつは畔柳ンン、通称クロ。俺やM氏と同じ中学出身で、俺とは部活も一緒だった。ちなみに先ほどの発言のうち最初と最後がこいつだ。

「まあ高校に入ったんだし、彼女の一人や二人は欲しいよな」と同意する俺にM氏が控えめなツツコミを入れる。

「彼女が二人はまずいと思うよ？」

「わかってるつつうの。そんなくらの心意気だってことだよ」

「あ、なるほど。二股かと思っただよ」

「んなわけあるかい。彼女いないうちから二股考えるやつはいねえだろうよ」

俺とM氏のやり取りを傍観していたクロが口を開く。

「あれ、でも佐々木は彼女いなかったっけ？」

「あ、そうだね」

M氏が便乗する。俺としてはあまり触れて欲しくない話題なのだが…

「…別れた、つつかふられた」

「えつつ!!」

クロとM氏が声をそろえて身を乗り出す。

「んだよ、そんな驚くようなことか？」

M氏はまだ呆然としている。クロが俺に尋ねる。

「だってあんな仲良かったのに、なんで？」

「遠距離とか、めんどいんだろうよ」

そう、俺の元カノは隣の県的全寮制の女子高に行ってしまったのだ。寮に入る前日、4月1日に別れを告げられた。信じられなかった、その日はエイプリルフルで…冗談かと思ってしまったが、冗談だと信じたかったが、冗談ではなかった。

軽く経緯を話していると二人の顔がみるみるうちにどんより…

「あのなあ、俺はもう気にしてねえんだからな。お前らが凹んでどうすんだよ」

「なんだか友情を感じてしまうではないか。」

昼休みの雑談にはちと空気が重くなってしまったのでなんとか話をかえた。一通り盛り上ったところでチャイムが鳴った。今いる俺の席は後ろから三番目の窓側。で、M氏の席は俺の後ろだがクロは教室の廊下側なので弁当の包みを持って席に戻った。

春の日差し&満腹感からくる睡魔に対し入学したばかりでイメージが大切という気持ちで武器に立ち向かう。俺の脳内で激戦を繰り広げていると後ろからM氏につつかれる。

「なした？」

「木下さんから、伝言預かってるんだけど」

こいつ自分の彼女をさん付けで呼ぶのな。

「あいつが？俺に??」

木下も同じ中学だしそれなりに話す仲だ。むしろ廊下で会えば一言二言からかってやるくらいだ。だけどわざわざ伝言するような用はないはずだ。

「なんか木下さんも伝言預かっただけみたい」

ますますわからん。なぜにこんな複雑な伝言ゲームを？

「まあいいや。で、なんだって？」

「うん。なんか今日の放課後、教室に残っててだってさ」

誰が何の用だ？放課後残ってすることか。

補習…さしもの俺もそこまで馬鹿じゃない。学級の話し合い…べつに学級委員でもないし、なにか行事があるわけでもない。リンチ…これはないと信じたい。入学して一ヶ月しないうちに敵を作るほど人付き合いが下手ではないはず。

一人考え込む俺にM氏が声をかける。

「なんだろうね」

「わかんね。でもま、お呼びとあれば残るしかないわな」

…俺もなかなか律儀な男だ。

「第2章・マシンガン」

「あゝ、今日も一日ご苦労さんっ」

誰に言うともなく授業を乗り切った労いの言葉を贈る。

「でもまだ入学したばかりだから楽だよな」

M氏は教科書やノートを鞆に入れながら返事をする。俺は教科書を机やロッカーに入れたまま帰りたいのだが、さすがに入学してすぐそうするのは気が引けるので今はしっかり持って帰っている。

すると帰り支度の済んだクロがこちらに来た。なにやら真剣な表情である。

「佐々木、M氏、この後時間ある？」

「僕は、その…木下さんと…」

照れながら言うところがかえってムカつくが、こいつの場合はもともとこんな性格だから仕方がない。

「あー、はいはい。佐々木は？」

「悪い、ちよいと野暮用があるさ」

普段お気楽なクロが真面目な顔をしているのが気になるが先約があるので仕方がない——にしても野暮用って初めてつかったなあ。

「そっか…それって時間かかるのか？」

「よくわからないけど、下手したらけっこうかかるかな」

実際のどの程度の時間がかかるかわからないので正直に言うておく。だがクロの用事もそうとう重要らしい。

「待ってちや駄目か？」

…どうしたものか。

M氏の顔を窺うがこちらも困惑している。なにしろ長い付き合いの俺でもクロのこんな顔は初めてだ。

「んじゃ図書室かどつかで待っててくれよ。用が済んだら連絡すっから」

まあ妥当な対応だろう。

「わかった、待ってるよ…」

クロが図書室に行ったあと、木下がM氏を迎えに来た。

「佐々木、Mくんから例の件、聞いたでしょ？」

（もう一度言っておくがここでのMくんもイニシャルトーク的なものではなく、木下は彼氏であるM氏のことをMくんと呼ぶ）

「ん？ああ。わかったけど、いったい誰が何の用なんだ？」

俺としては当然の疑問をぶつける。

「まあ待つてればわかるよ。じゃあね」

なにやら不穏な笑みを浮かべた木下は言いたいことを言ってM氏を連れて下校した。

現在教室に残っているのは俺を含め6人。内2人（♂）は部活に行くのにジャージに着替えているとこだし、他3人（♀）は放課後どこに行くかを話している。

（放課後だったって、最高で何時まで待つてりやいいんだ？）

とまあ今更な疑問が頭をよぎったところ、教室内は俺一人になっていた。

ガラガラッ

ドアの開く音に反応して顔を上げた。視界に入ってきたのは一人の女子、おそらく俺を呼び出したのは彼女なのだろう。

「よっ」

「おひさ」

俺が気軽に挨拶をした理由は簡単、知り合いだからだ。

名前はナンチャラ加奈。このボーイッシュで親しみやすい口調の女子は先日部活見学に行ったとき隣のコートにいた。俺はバレー部に見学にいったのだが、この時にスパイクをふかして彼女に当ててしまったのだ。たいした怪我にはならなかったがボールが当たった

拍子に転んでしまい足を捻ったようなので保健室に連れて行ったり
なんたりしたので親しくなった。

「えっと、木下に伝言頼んだのは加奈ってことでいいのかな？」

「そ、この状況で他にはないでしょ」

そりゃそうだ、加奈は木下と同じ組だしここはA組の教室だ。

それから10分くらいは互いの近況報告というか、雑談をしていた。話の切れ間に不意に目が合いなんとなく気まずくて黙ってしまった。
った。

そのまま俺は加奈が本題に入るのを待っていたのだが一向に口を開かない。変な緊張感をはらんだ沈黙が二人の間をよぎる。仕方ないので俺から話を切り出す。

「で、今日はどうしたのさ。バレーについて、とかけ？確かに俺は中学からやってたけど人様に教えられるほどでは…」

「違うの、今日は…その…聞きたいことがあるんだけどいいかな？」

加奈は顔を赤らめ下を向く。

俺の頭の上には疑問符が3つ4つ浮かんでいる。

「ああ、俺で答えられることなら」

「あのね、そのお…佐々木は彼女とか、いないのかなあって」

…またその話か。一日に二回とは、嫌な偶然だ。

「いないよ、今月の始めに別れたばっかだ。なんだよ、恋愛相談なら他のやつのほうがよくないか？」

ふられたばっかの男がアドバイスできるわけがない。

「相談っていうか、提案っていうか…モゴモゴ…」

なんだかいまいち歯切れが悪い。いつもの加奈はズバツと的確な発言をするタイプなのだが、そうとう言いにくいことなのだろうか。

「提案??」

「そうっ！」

急に顔を上げた加奈の瞳には決意と諦めと開き直りと混乱をこちゃ混ぜにしたようなものを秘めていた。…どないやねん？

「提案なんだけど、彼女がいないんならわたしと付き合ってみない？ほら、わたしたちけっこう気が合うしせっかく出会えたのもなかの縁ってどうかそれは初対面でボールぶつけられたのはちよつとムカツときたけどあれは不可抗力だしむしろそのあと保健室に連れて行ってくれたのに優しさを感じちゃったっていうかオブってくれてる佐々木の背中 of 広さに思わずうつとりしちゃったりしちゃって……」

やっぱり混乱していたらしい。途中自分が何を言ったのかわからなくなったように加奈のマシンガントークはいきなり尻すぼみになった。

「あつ……」

さっきと同じように顔を赤くして下を向く。これはやっぱり俺の返答待ちなのだろうか。

「あー、そのだなあ」

俺が口を開くと、とたんに再び加奈のマシンガンが火を噴く。

「ゴメンね変なこと言っちゃって好きとかそういうんじゃないってなっていうかお互い独り身なんだしこういうのもありかなあなんて思ったのもちろんわたしなんかじゃ嫌かもしれないけどもしよろしければいかかでしょうかなんて感じなのよ。あー、ゴメンっやつばなし」

「あ、おい」

どうやら加奈は恥ずかしさのあまり撤退を選んだようだ。俺の制止を振り切って教室から出てく。

夕日の差し込む放課後の教室。あっけにとられ呆然と立ち尽くし一人取り残された俺……

〜第3章・これが噂の〜

とりあえず用事が済んだ(?)のでクロに連絡を取る。つもりだったが図書室にいるのはわかつていたのでそのまま図書室に足を運ぶ。

図書室は1階の突き当たりにある。公立の割には蔵書数が多いので趣味を聞かれたら読書と答える程度に本が好きな俺としては嬉しい。

意外にもクロがいたのは純文学のコーナーだった。俺が肩を叩くと慌てて本を棚に戻した。

「は、早かったんだな」

そう言ったクロはなにやら見られてはいけないものを見られたような、そう例えるならオナニーしていると親が入ってきたときのような顔をしていた。

「まあな。とりあえず外出るか」

俺も先ほどの加奈とのやり取りを思い出しなんとも言いがたい気分になった。あれは告られたってことなんだろうか…

同じ中学の俺とクロはもちろん家の方角も同じになる。二人ともチャリ通だ。

チャリに乗りながらでは話がしづらいのでとりあえず途中にあるマックに入る。

「で、話ってなにさ？」

案の定クロはなかなか話し出さないのどこちから話をふる。なんだかこういいう状況に慣れてきた自分がいる。

「あのさ…C組のナンチャラって、どう思う？」

「はい？」動揺で声が裏返ってしまった。

「だから、C組のナンチャラ加奈をどう思うかって聞いてんだよ」

クロはなにやら赤面してうつむいてしまった。おいおい、そのナンチャラ加奈とまったく同じことしてるぞ？

「あゝ、それはなんだ…女として、とかってことか？」
いちおう確認してみる。

「もちろん」

…ここまできてクロの言いたいことがわからないような朴念仁ではない。が、つい先ほどそいつに告られた身としてはコメントしにくいことこの上ない。

「うゝん…けっこうかわいいとおもうよ。サバサバしてて話しやすいし」

「だよなっ！！」…目がキラキラしてるよお

これは素直に告られた事実を話したほうがよいのだろうか。このままでは「お前とナンチャラって部活隣だしけっこう仲いいよな？頼む！紹介してくれっっ！！」とかいわれてしま

「お前とナンチャラって部活隣だしけっこう仲いいよな？頼む！紹介してくれっっ！！」…った

さてどうしたものだろうか。正直なところ加奈からの告白を受け入れようと思っていたので困惑の極みだ。助けて…ドラ。もゝんなどと軽くトリップしていたらクロはそれを焦らしだと思ったようだ。

「報酬なら払う。紹介してくれたら昼飯一週間分、成功したあかつきには一ヶ月分奢ってやるから！」

かなり魅力的な提案だ…。しかし友を裏切ることとはできない。

「あんな、クロ。言っておかなきゃならんことがあるんだ」

「なんだ、不服か？」

「いや違うんだ。言にくいんだが…まずだな、さっきの野暮用ってのは加奈がらみだったんだ。俺はM氏に木下からの伝言を聞かされて、木下は加奈から俺に伝言を預かってたんだ」

ここまで言うところクロはさすがに驚きを隠せない様子だ。俺は勢いに乗って言い切る。

「でまあ、話の内容なんだが…なんというかそのお、加奈からの提案で『わたしたち付き合わないか』と。ま、つまりは告られたわけだ」

「……………で？」声のトーンがいつもより1オクターブ低い…

「まだ返事はしてないんだ。加奈が言うこと言ったら教室から出てうちまったから…」

言い切った。沈黙がとても苦しい…なにか言ってくれよ、なんて思っているとクロが口を開く。

「佐々木は、どうするつもりだったの？」

どうするつもりってのはつまり…

「…付き合うつもりだ」

そう、なんだかんだで言い忘れたが俺は加奈のことを悪くないと思ってる。

悪くないどころかむしろ顔はいいし、気が合うし、部活を一生懸命やってる姿なんかは思わず見とれてしまうくらいだ。俺は頑張り屋さんが好きなのだ。

つまり何が言いたいかというと、俺は加奈のことを好いているってことだ。

「…失恋、か」

そう言って顔を上げたクロは清々しい表情をしていた。

「んだよ、タイミング悪いなあ…あ、でも面と向かって断られるよりはましかな」

いつも通りのクロの軽口だった。もちろん無理をしているのは見え見えだったが俺に気を使わせないように演技しているのくらいわかった。けどどこまでわかっていているなら気づいてないフリしてやるのが優しさってやつだろう。

「ま、俺のほうが進めが良かったってことだろ」だから軽口で返してやる

「うっせ、調子に乗っていると付き合って一ヶ月しないでわかれるぞ」互いの冗談を笑いあう。少しホッとした。

「でもお前、俺がM氏かどっちかに相談しようとしてたよな…M氏
って加奈と仲いいつけ？」

ふと疑問に思ったので聞いてみる

「ん？あゝ、そんな時は木下つかってダブルデートとか」

「あ、なるほどな」納得

いいかげん外が暗くなってきたのでマツクから退散する。

黙々とチャリをこいでいるとクロがなにかをつぶやいた

「…お前でよかったよ……」

細い道を縦に並んで走っていた。後ろからのクロの声は俺の耳ま
で届かなかったので聞き返す。

「ああ？なんだって??」

ちようど広い道に出たのでクロが俺の隣まで追いついてきた

「お前でよかったったったんだよ」

「へ？なにが俺でよかったって??」

クロが急にスピードをあげて前にでる。

「この恋を相談したのも、ナンチャラが好きになったのもだよ！」
俺を追い抜いたクロの耳は真っ赤だった。

——— なんか、青春してるなあ俺。俺 i n 青春、なんつつて

↓第4章・夜桜ハッピーブレイン↓

帰宅した俺はベットのの上にいる。視界に入るのは見慣れた部屋の
見慣れた天井、部屋の中に特に目新しいもんはない。

しかし今の俺はまるでここが花いっぱい草原であるかのように
感じている！というとさすがに大げさだが脳内麻薬の分泌量が多い
のか、いやにハイな気分である。それもそのはず、今日俺は生まれ
て初めて告られたのだ。…たぶん

（加奈、かあ…いやぁ意外なところから俺の春はきたな。なんつうか、
北海道から桜前線が南下してきた感じというか、夢に春一番——猪
木がものまねしてる人——が出てきたと思ったらほんとに春になっ
てる感じというか。なんだかわかりにくい例え話はいいとして、や
っぱり俺から返事を言いに行ったほうがいいのか？でもなんかわ
ざわざ「付き合ってもいいよ」って言いに行くのは自意識過剰な感
じだし…もっかい加奈が来るのを待つか。いやでももしかしたらも
うこないかもしれないし俺から行くか。でもそれでドッキリとかだ
つたらやだな…むしろ夢オチ！？いやいやでもなあ）
なぞと脳内会議を開いていると耳元で携帯がなった。

「うわっひゃー！……っひゃ؟؟？」

なんだかよくわからない声を出してしまった。

「…誰だよ、びびるなあ」

携帯を開いて受信メールを確認する。知らないアドレスからだ。

>加奈です。今日はいきなりゴメンね？アドは木下cから聞きまし
た<

これ以降の内容は割愛させていただくが、用件を手短に言つと今
から会えないか、ということらしい。会えないかもくそも俺んちの
近くまで来ているのだ、会わないわけにもいくまい。

すぐに返信して外出する。加奈が待つてるのは公園、だいたい走
って5分くらいかな。

公園に着いた。乱れる息が整うのを待たずに公園の中を見渡すが、街灯が少ないから真っ暗でよく見えない。市はこういうところに金を使うべきだと思う。

加奈はブランコに乗っていた。言わずもがな、児童用のブランコは加奈には小さい。

「鎖が千切れるぞ」もう呼吸の乱れは収まっていた。

「人を待たせといて開口一番に憎まれ口？」

俺が超能力者でもない限り加奈より先にここにいるのは不可能だ。

「それでも精一杯がんばったんだぜ」

「うん、わかってる」

そう言っただけで加奈は優しく微笑んだ。運動会で一番になった子供をほめる母親のように。

「まあ、俺も話があったからちょうど良かったよ」

「そう、きつと同じ内容ね」放課後のように赤面したりはしない

さて今回も俺から話さねばならないのだろうか、なんて思っていると加奈が口を開いた。

「あのね、さっきは言うこと言っただけで逃げちゃってごめんネ？今度はしっかり覚悟を固めてきたから」

内容は予想通り、俺の知る加奈って女は中途半端なことは嫌いなんだ。

「いつからとかなんでとかそんなのは自分でもよくわからないけど、わたし佐々木のことが好き。まだ知り合っただけ月もたつてないけど、そんなの関係ないよね」

最後まで言い切るとさすがに恥ずかしかったか、すこし俯く。心なしか肩が震えているように見える。これは緊張とかでなく武者震いのような気がする。

そのまましばらく待っていると震えがピタッと止まった。

「わたし佐々木が好き、わたしと付き合っただけ」

加奈は顔を上げしっかりと俺の目を見つめている。ちょっと命令口調なのと見つめるというよりは睨むという表現のほうが正しい感じだが、逆に加奈の気持ちは十二分に伝わってきた。

こりゃ俺もすっかりと答えてあげなきゃな…

「Me too」英語で言ったのは照れ隠しです、許してください。加奈の表情が『何言ってるんのコイツ?』って顔から『思考』、『理解』、『喜び』、とわかりやすく変化していく。微笑ましいなあなんて思っていると、『喜び』から更に変化が。これは…『悪巧み』??

「わたし馬鹿だから英語わかんない。わかりやすく言ってるほど、そうきましたか。まあ確かに俺が悪かったと思わなくもない。

さて、この俺のほとばしる熱い気持ちをどう表現しようか…

A: simple is the best. 「好きだ」と言う

B: 口で言うより行動で示せ。思い切ってキスをする

C: 愛しくてもたつてもいられない。抱きしめちゃう

D: ここはいつちよ某ドラマより、道路にでて「僕は死にません、あなたが好きだから」って

…さあどうすつか。オーディエンスはもちろんテレフォンもファイフティファイフティーもつかえない。

「ね、早くっ」

うわあ、期待に胸膨らませちゃってるよ…それなりに胸おおきいんだからそれ以上膨らますなよ…

なんて下ネタにはしってる場合じゃないよな。向こうはこれでもきつと真剣なんだ。

うーん…どうする?どうする俺っ!?

〈第5章・翌日（朝）〉

入学してから初めての雨。

カッパを着てチャリつてのもありだけど今日はバスで登校することにした。同じ考えのやつは多いらしくバスは同じ制服を着た同年代の男女でひしめきあっている。俺の隣には加奈がいる。

「混んでるな」

「うん……」

さつきからずっとこんなんだ。バスのなかで俺を見つけた加奈は俺の隣まできて俺に声をかけた。しかしそこから会話を切り出すわけでもなく、俺から話をふってもさつきのようにことごとく切り捨てるのだ。

「そんな照れるなら声かけるなよ……」思わずつぶやく

どうやら加奈には聞こえなかったらしい。俺だって恋愛経験が豊富なわけではないし、正直かなり照れてます。

人のはなつ熱気がいい加減イライラしてきたころ俺らの高校の最寄のバス停に到着した。

先に降りた俺はなんの気なしに傘を加奈の上にかかげてやった。

俺としてはバスから降りた後に傘を差したほうがバス停が混雑しないと思つての行動だったのだが……

「ありがと」そう言つて加奈は俺の傘に入つて、寄り添ってきた。なるほど、たしかにそう解釈するのが普通だ。俺が……相合い傘しようとした、と。

「……………」

ヤバいくらいに恥ずかしい。実際、かなりの量の視線を背中に感じる……追い抜くときに振り返つて傘の中を覗き込んで行くやつらいた。確かに入学して、四月中に付き合いはじめるつてのは珍しいか。

だがしかし、そのくらいでめげる俺ではない。なんてったって隣

にいるこの女子はクラスメイトや部活の仲間と話してるとよく名前が出る。学年一とは言えないが十本の指には入るであろう人気だ。その人気者が俺の彼女なんだ！気分がいいからもっかい言うが、俺の彼女なんだ（しかも現在相合い傘中）！

とまあ俺が脳内幸せ自慢を繰り広げられている隣でその噂の彼女とやらは何をしていたかというところ、熱気ムンムンのバスから降りて頭が冷えたのかはたまた俺同様脳内会議でもしていて結論がでたのか、普段の調子を取り戻し表情が戻っていた。

「元気になったけ？」

「うん、もう大丈夫。うじうじしてるのなんかわたしらしくないよね」

笑顔で俺を見上げてくる。俺はこういう笑顔がたまらなく好きだ。「おう、やっぱり加奈は笑顔でいたほうが可愛いよ」

半ば反射的に言ってしまった。今日二度目だ、昨日浮かれすぎて口のネジが外れたか…

「ちょ、なに言ってるのさ」やはり赤面してしまった
「悪い…」

傍から見たらこういう初々しさがムカつくんだろう。俺も自分の目の前にこんなやつらがいたら思わず殺意を抱いてしまう。男が知ってるやつなら後ろからドロップキックくらいかますかもしれない。人の幸せを妬む通り魔はいなかったらしく俺たちは無事に学校に着いた。玄関で加奈が友達に会ったのでそこで別れそれぞれの教室へ向かう。去り際に振り向いた加奈の口が「あとでメールする」と動くのが確認できた。俺ってば幸せすぎて死ぬんじゃないだろうか…

教室の前まで来て立ち止まる。クロにはどんな顔をして会えばいいんだろ…ちゃんと報告するべきなのか。

悩む俺に誰かが後ろから声をかけた

「おはよ。なにやってんの？」M氏が不思議そうな顔でこちらを見

ている

「おっす、別に何でもねーよ」

どうにか笑って誤魔化しながら扉を開ける。

まず視界にはいったのは、丸くて顔より少し多きくらいで青・

黄・白の…バレーボールだった。

「はぐっ」

もちろん顔面直撃。そりゃそうだ、気づいたときには視界いっぱいにはバレーボールがあったのだからよければ俺はボクシングでも始めるだろう。

「…大丈夫？」M氏が心配して覗き込む

「大丈夫なわきゃないだろ…なにすんだよっ!!」

俺は犯人を探すがだいたいわかっていた。そいつは俺の席に座りニヤニヤと笑っていた。

「おいこら、どういうつもりだ。納得いく理由を原稿用紙3枚分でのべろ」

俺は犯人、もといクロににじり寄る。

「宿題聞こうと思ってたのに、来んのがおせえんだもん」…原稿用紙一行分くらいか

どう話し出すかをさんざん迷っていた身としてはなんであれきっかけができてよかった。まあバレーボールを顔面にくらうくらいは認めよう。

それにしても理由でっちあげるのに宿題ってありきたりだなあ。

宿題はないだろ宿だ…い??

「…宿題って、なんの？」

念のため確認する。冗談であることを祈る俺にM氏が無情な言葉を放つ。

「1時限目の数学、方程式の練習問題をみつつやってこいってやつ」

……………

「マジンガー？」

「Z??」キョトンとした顔でM氏がノってくる

「どうしよ、やってない…」

昨日の夜は勉強どころではなかったのです。頭んなか真っ白だったし。

クロがニヤツと笑う。

「俺はもう写させてもらったよ。20分くらいかかるから今からじや無理だね」

嬉しそうに言いやがって…。くそお、こおいうオチかよ…

「こうなったら授業で当たらないことを祈るしかないな…」

浮かれ過ぎはよくないと悟った15歳の俺…

ゝ第5・5章・翌日（メール）ゝ（前書き）

今回は息抜きがてら短いものを書きました。 閑話休題ってことで
笑）

〈第5・5章・翌日（メール）〉

教室についてすぐ加奈はメールをしてくれたらしい。朝の一連の騒ぎのせいで気づかなかったのだが、授業中に携帯を開いたら新着メールがあつたので先生の目を盗んで確認する。

> ― えつとあゝなにをメールしたらいいのかわかないや（笑）
とりあえず今朝と一緒に登校できて嬉しかった♪でもいきなり相合
い傘は恥ずかしいよ（^^ゞ――<

やっぱり俺が相合い傘をしたがつたことになっているのか…まあ俺も嬉しかったからいいけどさ

> ― 教室着いてから宿題の存在を思い出したからメール気づかんかったや、ゴメンね。俺もバス中で加奈に声をかけられた時は「今日バスにしてよかったな」って思った。不覚にも幸せってやつを感じてしまった（照）――<

送信する前に確認してみた。…なんか恥ずいので打ち直すことにする。

> ― 教室着いてから宿題の存在を思い出したからメール気づかんかったや、ゴメンね。俺もバス中で加奈に声をかけられた時はビツクリしちゃったよ（笑）――<

まあこんなもんか。今送っても授業中だし、加奈は返さないかな…？でもま、とりあえず送っとくか

そう思い改訂版のメールを送って授業に戻る。板書を始めて数分もしないうちに携帯が震えだす。

> ― 授業中にメールするなんて、佐々木って不良だあ（笑）先生に言っちゃうぞおお（^^）oooooooo――<

って自分も速攻で返してんじゃないか。思わず笑ってしまう…ツツコンでほしいオーラがビンビン伝わってくる。とりあえずご要望通りの反応をしてやる。

> ― って自分はどうかんだよこの不良娘（笑）俺は数学だから板

書さえやれば問題ないからいいさ——<

>——ん？なんのことかなあσ（＾・＾；）？？——<

なんて他愛もないメールを続けた。俺も加奈もメールを打つのが早いらしくかなりテンポよく話が進む。部活が終わったら一緒に帰ることを約束したとこで先生に問題を当てられた。問題をどうにか解き終わり席に戻るとM氏が俺に話しかけてきた。

「ねえ、さっき何で携帯を見ながらニヤニヤしてたの？」

∴ニタニタしてたのか、気をつけなければ。

「何でもねえよ、面白いwebサイトみつけたさ」

「ふうん」納得したようないような表情を浮かべる

今朝浮かれすぎはよくないと悟った俺の決意は留守だったらしい。

〈第6章・翌日（昼）〉

1 時限目の数学は巧みな話術で先生からヒントをたくさんもらって無事に問題を解き終えることができた。

しかしその後なぜか全ての授業で指名されるという不幸に見舞われたがどうにかこうにか乗り切った。4 時限目が終わるころには疲労しきっていて昼休みを告げるチャイムが天使の福音に聞こえたくらいだ。

「… やつと飯だ」

いつもならテンションぶっちぎりの状態で叫ぶこの台詞にも今日は力が入らない。

「大変だったねえ。今日おみくじ引いたら間違いなく『大凶』だね」
「さんざん不幸を味わった俺としてはちつとも笑えない冗談を言いながらM氏は弁当の用意をする。

「今日一日だけでこの不幸が終わることを祈ってるよ」

「佐々木はこの程度の不幸ならプラマイ0だろ？」

クロは隣の列のやつからイスを拝借してくる。配置としてはM氏と俺が机を向かい合わせにして、その横にクロがくるような感じだ。授業で限界まで疲労していた俺はクロの一言にまっこうから挑む。

「まあそうかもな。つか全然幸せのほうに勝ってるよ」

「いやいや今までのなんてきつと序の口だよ。覚悟しといたほうがいんじゃないかな」

いつものように話の流れがつかめないM氏はキョトンとしている。

「なんの話？佐々木君いいことあったの??」

「あー、とりあえず飯にしようよ。その件については後でゆっくり話すから」

とりあえず飯を食う3人

「で、さっきの続きは」

切り出したのはクロ。ホントに飯を食ってすぐ、ちゅうかまだ俺の口の中には最後に食った唐揚げが残ってる。

「ほひふへひよ、ふえっはひははあ」——訳：落ち着けよ、せつかちなあ

「口の中に物入れてるときは喋っちゃダメだよ」

M氏の天然っぷり爆発のツツコミを聞きながら唐揚げを飲み込む。

「ふう…とりあえず場所かえよぜ」

弁当箱を片付けながら俺は言った。

「ここじゃダメなの？」とM氏

「ま、一応な」

教室を見回す。昼飯を食い終わってめいめいが思い思いの昼休みを過ごしている。誰に聞かれるかわからない状況ではあまりよろしくない。

「そろそろ屋上も空くころだろ」

クロの提案を採用し俺たち3人は屋上へと向かう。

C組の教室の前を通るときちょうど加奈が出てくる。一緒にいるのは木下だ…こいつら仲よかったんか？

「お、Mくん！どうしたの？」すかさず木下が声をかけてくる

「ん？ちよつとね、佐々木君がいいことあったらしいから。その話を聞きに屋上に」

おいおい、状況考えてくれい…つってもM氏はなんの事情も知らないのだからしょうがない。誰を責めるわけにもいかない

M氏の発言に女子2人は何を考えているかわかり易いリアクションをした。当事者として自覚があるのだろう、加奈は赤くなって俯いた。そして木下はというと…あからさまに何かを企んでいる笑みを浮かべた

「へー、興味ある。うちも聞きたいなあ…ね、加奈も興味あるでしょ？」…やっぱり

「でもほら、男子だけでしか話せないようなことかもしれないじゃ

ない。邪魔しちゃ悪いよ」

ナイス加奈！俺は心の中でガッツポーズする

「んなことないよ」

思わぬところに伏兵が。一番気まずいだろうと思っていたクロが…なぜ???

「さ、時間なくなるから早く行こうぜ」

状況の変化についていけない俺をほったらかしでクロが屋上へ向かう。

「わーい」

木下大喜び、加奈赤面、M氏傍観、俺・・・ド焦り

屋上には何人かの人がいたがうちの高校の屋上はそれなりに広いので場所は十分あった。

できるだけ人口密度の薄いほうの隅につくと木下が口を開く。

「で、なにがあったのお？」いつのまにか主導権を握っている

俺は全員の顔を見るフリをして加奈の様子を確認する。なかなか複雑な表情だ。

「まあ、なんだ。そのお・・・」

やっぱり言いづらい・・・秘密にしようとか加奈と決めたわけでもないが、付き合った次の日に他人に報告つてのを加奈はどう思うだろうか。

「なんだよ、言うなら言うではつきりしろよ」

クロと木下が「ざまあみる」と言わんばかりのニヤケ顔で囁し立ててくる。・・・覚悟を決めるか。

「えー、わたくし佐々木ホニヤラと、なぜか、偶然にも、こちらにおりますナンチャラ加奈さんは…昨日よりお付き合いさせていたくことになりましたことを、ここに宣言します」

声高らか、というわけにもいかなかったが、はつきりと言い切った。途中言葉遣いがおかしかったり選手宣誓みたいになったりは御

愛嬌だ。

一仕事終えた感じで余韻にひたりつつも周りの反応を確認する。
なんだかんだで俺は小心者なのだ。

加奈は耳どころか首まで真っ赤にしてもじもし、M氏は「おめでとー」と祝福の言葉を。ここまでは予想通りなのだが問題は残りの2人、クロと木下だ。2人で顔を合わせて…頷きあって…笑って…こちらを向く。なんだよ、怖いよお前ら

「プロポーズの言葉は？」「お2人はどこまでの関係なんですか？」
「お互いのことはなんて読んでるんですか？」「どこが好きなんですか？」

木下はメモ帳を持っているフリをしながら質問責め、クロはカメラを構えているフリをしてカシヤカシヤ言ってる。

…芸能人の結婚記者会見かよ…冷やかしもここまできると清々しい。

俺の思考回路はけっこうお笑い思考だ。よってここで照れたり怒ったりしたら負けだ…

「すいません、彼女がテンパってるんで質問はひとつずつお願いします」

極上の作り笑いをしながら加奈の肩を抱き寄せる。実際にテンパっていた加奈は「わわっ」と驚いている。

まさか俺がノツてくるとは思わなかったのだろう。取材陣（クロ&木下）は対応に困っている。

「んじゃ2人の馴れ初めを教えて」

と、今まで干渉してこなかったM氏が質問してくる。こいついつもこんなんだな…

「馴れ初めかあ…馴れ初めって出会い？付き合ったとき？」馴れ初めという単語が詳しくわからない

「細かいことはとりあえず今度ってことで、付き合ったきっかけってことで」

なるほど、初めからそう言ってくれよ。きっかけとなると…俺が

告られたわけだが、俺が言うのもはずいな。とりあえず加奈の様子を確認する。

と、いつのまにか混乱状態から復帰した加奈と目が合う。加奈も同じことを考えていたのだろう。向こうが意味ありげに頷いたので加奈に任せることにした。

「昨日、わたしから佐々木に告ったの。で恥ずかしながらその場は逃げちゃいました」その時のことを思い出したのだろう、照れ笑いを浮かべる

「それでそれで？」

記者（木下）が架空のメモ帳の上にペンをはしらせる。

「このままじゃよくないと思って夜にメールで呼び出して、もう一度しっかりと気持ちを伝えました」

記者会見ごっこの雰囲気なのか、加奈が心なしか敬語なのが面白い。せつかく和やかになつてきたので茶化してみる。

「うゝん、75点。一部嘘が含まれてるなあ」

俺は横から口を出す。

「告ったつていやあ聞こえはいいけど実際は言いたいこと言つてすたこら逃げたし」

「えっ、そうなの？ダメじゃん」

木下が驚き半分、呆れ半分の表情を浮かべる。

「ちょ、別にみんなにばらさなくたっていいじゃん！」

焦りまくる加奈。俺の横腹を攻撃してくる。いくら運動部に所属していても女子、あまり威力はない。が、グーで殴る（いい感じのレバーブロー）ってのはいいかなものだろうか・・・

「おいおい、そのリアクションは肯定ととられるぞ？」

念のため忠告してみる。

「あっ、嘘！？ちょ、違うからね」

言われて気づいたらしい

「ふゝん、そうだったんだ。へゝ」クロが一言

「そっかあ、いつも元気な加奈さんもそういう時は一人の乙女なん

だねえ」とM氏

「お、Mくんいいこと言った」加奈も可愛いもんだ、うんうん「これは木下だ

みんなして加奈の怒りに油を注いでいく。このままではまずそうなので俺なりにフォローをば…

「ま、そこらへんにするさ。あまり俺の彼女をいじめないでくれよ」朗らかに笑いながら言う。我ながらナイスフォローだ。

なんて思っていると加奈の顔がみるみるうちに赤くなって…

ぼふっ

・・・俺の腹に激痛がはしる。へ????

加奈はぶいっつと顔をそむけると屋内へ続く扉のもとへと走る。

「あちゃゝ、やりすぎたっぽいね」

木下も加奈を追う。残されたのはいつもの男3人。

「見事な右ストレートだったな」感心した様子でクロが言う

なるほどこの痛みの原因は加奈の右ストレートってことか。しか

もこの痛さの感じは鳩尾にはいつたらしい。

「…いいもん、もってんじゃん。…ぐふっ」

どこかで聞いたことのあるような最期の一言を残し俺は膝から崩れる。こうして我が高校の屋上で開催された記者会見は幕を閉じた。

最期の言葉とか言いつつ、この後俺はしっかりと自分の足で教室に戻り午後の授業を受けた。

とりあえず加奈にメールをしたものの返ってくるのは素っ気ない返事ばかり。授業を受けながらも『なにがいけなかったんだ?』なんてマジに考えている。

俺って・・・鈍感????

〈第7章・翌日（放課後）〉

その日の放課後、メールでは一緒に帰る事になっていたがいかにせん怒らせたままである。

待ち合わせ場所は校門、では目立つので昨日のように俺が教室で待つてることになった。待つて俺は本当に加奈が来てくれるのか不安でたまらない。とりあえずただ待つているのもなんなので読書をして待つことにした。

俺の趣味は読書だ。身体つきは体育会系、顔つきはいかつい系の俺が今手にしているのは恋愛小説。普段はSFとか歴史ものとかばかり読んでいる俺がなぜ恋愛物を読んでるかというところ…答えは簡単、恋愛しているからだ。昨日の夜、親が書いたためている本棚から拝借した。

タイトルは俺は知らない英語。内容はありきたりで『顔普通勉強普通運動普通でとりえは人の良さってな感じの高校生（♂）が街で見かけた高校生（♀）に一目惚れ、なんと彼女は同じ高校の生徒だった』みたいな感じだ。登場人物の感情表現の仕方がユニークでなかなか感情移入がしやすい。

昨日の夜に三分の一くらい読んで寝たので続きが気かりだった。早速読み始めると本の中では高校生（♂）と高校生（♀）が喧嘩をしている。そこに描かれている高校生（♀）の罵声が俺の心に突き刺さる。心当たりがありすぎて高校生（♂）に同調しきってしまう。自分の置かれた現状もあつて気分が沈んでくる・・・

「はあ、加奈遅いなあ」

溜め息をついて黒板の横にかかっている時計を見上げると20分ほど経っていた。相当集中して読んでいたようだ。そろそろ帰るかどうかと考えていると携帯がなった。スキマスイッチの『奏』、メールだ。携帯を開いて画面を見る。

>―後ろにいるよ―<

——！！？

慌てて振り向くと、そこには後ろ（M氏）の席に座る加奈の姿があった。怒っているような照れているような、バツの悪そうな顔をしている。

「い、いつからそこに？」

「…10分くらい前」

「えっ！」嘘・・・全然気づかなかった・・・

なんと言い訳しようか考えてると、黙り込んでいた加奈が急に小さく吹き出した

「ニヤニヤしたり眉間にしわよつたり、キモいよ？」

そう言って笑い出す。怒ってたんじゃないん？

「え、マジ？ニヤニヤしてた？」

「うん、むちゃくちゃ」

普段の加奈だ。少しホツとする反面なんか納得いかない。

「・・・怒ってたんじゃないの？」

思い切って聞いてみる。

「あー、昼のこと？違うよ、あれは・・・恥ずかしかったの」

思い出したように赤くなる加奈。恥ずかしかった？

「なにが??」

「そのお、木下さんとかに・・・『俺の彼女』って」

確かに言った、「あまり俺の彼女をいじめないでくれよ」だったかな

「それが…嬉しかったっていうかなんていうか」

なるほど、俺が殴られたのは照れ隠しか。

「怒ってたんじゃないかったんだね」安心安心♪

「怒る理由がないじゃない」

そう言って加奈が笑う。不覚にもドキッとしてしまった。それがなんだか悔しかったので悪戯を試みる。

「やっぱり加奈は笑ってるときが一番可愛いよ」言ってる俺も恥ずかしいが・・・

加奈はというとみるみる内に首まで真っ赤にしてうつむいて、ちよっとプルプルしてる・・・

バシッ

俺の目の前には俺の左手が捕まえた加奈の右手がある。予想通り、照れまくった加奈は得意の右ストレートを繰り出したのだ。今回は顔面狙いか、ある程度予想してたからガードできたものの・・・攻撃を完全に読まれていた加奈は悔しそうにしている。

「さ、帰ろうか」

加奈の手を離して本をしまう。そのまま手を繋いで帰る、なんてことも考えてたが何度も言うように俺も恋愛経験は少ないので恥ずかしいものは恥ずかしい。

2人で肩を並べ教室から出る。

朝と同じようにバスで帰るのでバス停へ向かう。部活をやってるやつもいるから朝より人が少ない。

昼には雨が上がっていたので今度は相合い傘せずにすんだ。

「とりあえず一回駅まではいくよな？俺はそこから乗り換えるんだけど」

現地でいろいろ話すのもなんなので事前に確認しておく。

「うん、わたしは。。行きのバス。。。。。。」

何か言いたそうだ。とりあえず様子を見る。

「あのさ、帰りにどつかよってかない？まだ時間は早いし」「いいけど...どつか、とは？」

今はあまり金がないから場所によつては・・・無理かもバスが来たのでまず乗る。あまり混んでいないので2人で並んで座れた。

「あ、行きたいところあった。買い物に付き合ってもらっていい？」

買い物か・・・一般に女の買い物は長いという。てか実際俺も何
度か経験はあるのでわかるが。

しかし俺は特に行きたいところはないし、断る理由もないか・・・
「ああ、いいよ。なに買うの？」

「服とか、いろいろ」

「・・・服かあ。だいたい予想してはいたが、一番厄介だ
先に言つとくけど『ねえ、これ似合う?』とか聞くのはパスな」
俺の一言が相当意外だったらしい。加奈は普段の三割り増しくら
いに目を開いている。

「俺、服とかよくわかんねえからさ。自分の服だつて適当だし」
とりあえず笑つて誤魔化す。リアルに俺はファッションに疎い。

平日は制服だし、人に会わない休日はジャージでごろごろしてるし・・・
「ぬう・・・」

そうするつもりだったらしく加奈は残念そうな顔をしてる。

すると今しがたバスに乗ってきた女子高生が加奈に声をかける。

「もしかして、加奈? ひさしぶりじゃ〜ん」

「さん、久しぶり」

どうやら加奈の同中のやつらしい。どうでもいいキャラなので名
前は割愛させていただく。なんなら自分なりに好きなように決めて
いただいてもかまわない。

「あ、もしかしてこの人カレシ??」ものごっついニヤニヤしてる
「うん、わたしのカレシの佐々木くん」

「・・・わたしの?」・・・「カレシ」?・・・

おいおい、なんだか・・・嬉しいぞ。うゝん、俺って単純。

「へゝ、加奈つてけっこう手え早いねえ」

「ちよつと、そういう言い方しないでよ」

「ペチャクチャ」

「ペチャクチャ」

約15分、バスが駅のターミナルに着くまで俺は放置。まあ楽しそうで何よりです。

「さて、行きますか。どこの店？」

ってことで加奈のあとにしたがって買い物を見ている。釘を刺しておいた甲斐があって加奈が俺に意見を聞かなかったが、鏡を見ながらあわせる度にこちらの様子をうかがってくる…

「うーん、さっきのがよかったかもね」

加奈の粘り強さと俺の退屈の相乗効果により俺はついに口を出してしまった。ついに、といっても現在9個目の店。手に取った服の数（＝加奈が俺の様子を窺う回数）は余裕で二桁だ。

加奈の表情がとたんに明るくなる。…俺ほどではないがわかり易いやつだ。思わず笑ってしまう…そんなに気になったのか。

「なんでそんなに俺のほう気にすんのさ？」

試しに聞いてみると、

「やっぱりせつなくならカレシの好みとか聞いときたいじゃん。参考までにさ」

なるほど、そりゃ嬉しいな。

「なんだ、そういうことか」

そうとなればせつかなので俺の好みを言いつつ更に幾つかの店を回る。

そろそろ疲れて帰ろうってことになった。結局買ったのはほんの少し…やっぱり女子の買い物はたいへんだ。

「んじゃまた明日」

バスにのる加奈を見送ったあと伸びをする。俺の背骨はすごい音を立てた

く番外編・クロく

「彼女欲しいなあ」などと思う今日このごろ。はじめまして（？）クロです。今回は番外編ということで、本編から遡ること数日の僕の思い出を・・・

正直、一目惚れだったんだ。入学式ってクラスごとに縦に並ぶでしょ？彼女は僕の二つ横の列で、少し前に座っていた。僕はA組だから彼女はC組だとわかった。

激しく胸が高鳴った。これが恋というやつなのだろう・・・どうやらいままで僕が恋だと思っていたのは思い込みにすぎなかったらしい。

入学式は終わり割り当てられた教室へと向かう。僕のクラスはA組。クラスには同じ中学だったやつもちろほら・・・部活が同じだったやつもいる。というか部活の中でも仲の良かったやつだ、名を佐々木という。

「よう、1年よろしくな」

とりあえず先生がくるまで暇なので声をかける。僕が『ク』、やつは『サ』なので席は近い。

「ん？おお、クロじゃん。同じクラスだったんだ」

「おいおい、知らなかったのかよ」呆れた・・・

こいつはなんというか飄々としたやつで、つかみどころのない性格だ。しかし会話は面白いし真剣な時はそれなりに頼りになる、い

い奴だ。と言っておく・・・

「いやあ、すっかり緊張しちゃってよ」

あはは、と笑う顔に緊張は見られない。

「M氏もいるよ」

きつと知らないだろうと思い補足説明をしてやる。

「そりやまた偶然だな。どこだ？」

と言いつつ佐々木は教室を見回す。『マ』だから席は教室の隅。

こいつはまあ簡単に言つて、天然だ。どこか『世間知らずのお坊ちゃん』って雰囲気がある。ちなみに頭がいい。

「ほら、あそこ」M氏の席を指差す

「お、いたいた。なんだ、けっこう知ってるやついるもんだな」

その後も雑談を続けたが先生が来たのでそこで話しは途切れる

「うつしや、今日からよろしくな」

と佐々木が言う。今は放課後、というか今日は入学式なので午前で終わり。場所は教室、いるのは僕、佐々木、M氏、他数人。

「うん、よろしくね」「よろ」

僕とM氏は思い思いの返事をする。

「で、2人は部活どうするさ？」と佐々木が聞いてくる
たぶん珍しい（と思う）がうちの高校は入学直後から部活に入部できる。

佐々木が続けて言う。

「俺はもちバレーやるけどよ」

「僕は少し見学しようかと思ってる」と答えるのはM氏
「クロは？」

「ん…俺はラグビーでもしようかなあ、なんて」

「へ?????」2人が声をそろえる

これは春休み前から思っていたことだ。せつかく高校に入ったのだから新しいことをしようかと

「なんで？バレーは？？」

同じ部活でバレーをやっていた佐々木としては気になるらしい。

「まあ、中学で十分楽しんだから」笑いながら言う

これは嘘。ホントは・・・自分の限界に気づいちゃったってこと。佐々木はセッターで僕はライトだった。ポジションは違うけど僕らの才能の差は歴然としていた。そもそもがっつきりしていて明らかに重そうな僕の身体にバレーは不向きだったんだ・・・

なんてこんなこと言えるわけがない。ラグビーに興味があるのはホントだからあながち嘘じゃないし。

「そっか、でもクロならラグビーもすぐ上手くなるだろうな」

「そうかなあ・・・」あまり自信はないんだけど

「だってお前、努力家じゃん」

「そおか？」

「うん、そうだね」

M氏も同意するってことは世間の僕に対する評価は『努力家』らしい。

「今日はどうするの？みんな部活行く？」とM氏の質問

「さすがに入学初日から部活行く気にやらんて」

という佐々木の発言に首を縦に振って同意する。

「んじゃ寄り道しながら帰りますか」

3人でぞろぞろと玄関へ向かう。

玄関は体に馴染んでいない制服に身を包んだ生徒がたくさんいた。その中に入学式で見たあの子がいた。C組の下駄箱には見慣れた顔の奴がいる。同じ中学で何度か話をしたこともあるやつだ。ちょうどいい...

「おお、。。じゃん。そーいやお前もココだったな」

なにげない感じで話しかけてみる。もちろん特に用はない。近づいて彼女の使った下駄箱をチラ見・・・名前を確認する。

（加奈さん、かぁ）

心の中で名前を呼ぶ。もしかするとかなり重度な恋の病なのではないだろうか・・・

「んじゃまた」

用は済んだので会話はしてないが佐々木たちのもとへ戻る。かなり拳動不審だろうか『恋は盲目』ってやつだ

数日後、彼女が女子バレー部だと知り既にラグビー部に入っていた僕は後悔する。高校に入ってますます仲良くなった佐々木が加奈さんと知り合いになったことを知り影ながら感謝した。彼女が一部男子の間で評判がいいことを耳にして少し焦る。

そして、思い切って佐々木に相談することを決意。このころには既に結果が決まっていたことに気付いたのは、そんな後のことではない・・・

〈第8章・入所式〉

うちの学校の伝統行事で『ゴテケン』なるものがある。御殿場研修、略してゴテケン。入学したての一年生にクラスメイトとの親交を深めるために用意された行事で、青少年センターに二泊三日で研修に行く。研修と言っても内容はウォークラリーしたり自己紹介したりと、まあそんなもんさ。

しかし先日彼女ができたばかりの俺にとって、これは学校行事とはいえ彼女と初のお泊りなのだ。多少の緊張はしかたないだろ？

「おい、顔色悪いぞ？」

今は移動のバスの中。隣の席のクロが声をかけてきた。

「ああ、ちよい寝不足でな、酔ったみたいだ」

そう、昨日の夜緊張のあまり寝付けなかったんだ。俺は遠足前日のガキか…

「たく、加奈さんが見たら情けなさすぎて嫌われるぜ？」

そう言ってクロは笑う。

あの屋上での記者会見以来俺ら5人はよく一緒に行動するのでクロは加奈のことを『ナンチャラさん』ではなく『加奈さん』と呼ぶようになった。それどころか加奈ネタで俺をいじりまくるので俺としては気が楽になった。

バスがセンターに到着したので順番を待つてバスから降りる。御殿場は俺が住んでいるとこより標高が高いので少し肌寒い。バスの熱気に慣れた肺に冷たい空気が入ってくのを感じる。

とりあえず入所式とやらがあるので体育館へ向かう。いつも思うがなんで入所式なんてやる必要があんのかねえ。ま、そういう決まりみたいだししかたないが。

「あー、肩いてえ」

二泊三日分の荷物は重く、鞆の紐が肩に食い込む。

「ね、早く部屋で休みたいね」

俺の隣でそういうM氏は最近よく見かけるキャスターのついた旅行鞆を使用している・・・

「お前は肩痛くなんねえだろうが」

「そうだ、んなこと言うなら俺らの苦しみを味わえ！」

M氏を挟んで向こう側を歩いてるクロが言う。俺も同意し自分の荷物をM氏の肩にかけようとする。

「わわ、重いつてば」

うろたえるM氏が面白くてクロと2人で両側からM氏とじゃれる。

ドンッ

「ぐへっ」情けない声が出てしまった

誰かが後ろから荷物を俺のケツにぶつけてきたようだ。慣性によつてなかなかの勢いでぶつかってきた。

「痛ーなあ、誰だ?！」

怒って振り向くとそこには木下と・・・加奈がいた。

「うつさい佐々木、Mくんいじめるな」

どうやらさっきの攻撃は彼氏をいじめられた木下によるものだったらしい。

「いじめてたんじゃねえよ、じゃれてたんだよ。なあ、M氏?」

「だね。まあ重かったのは事実だけど」

おいおい、そういうこと言ったらまた俺が攻撃されるだろうが…
「いじめはやられたほうがいじめだと感じたらいじめなんだぞ」

よく聞くフレーズを口にしながら木下の攻撃は続く。

「痛っ、痛っ。おい加奈、木下を止めてくれ」

木下のとおりで笑っている加奈に救援を求める。

「んゝ、その要請は却下されます。あきらかに佐々木が悪いし、見

てて面白いから続行♪」

「そ、そんなあ」

加奈の一言で調子に乗った木下は更に攻撃を激しくする。いつの間にか共犯だったはずのクロまで一緒になって笑ってる。

「おい、クロだって共犯だろ」

木下の鞆を避けながら訴えてみる。いくら悪ふざけといっても金具が当たったりするとだいぶ痛い。避けるにこしたことはないのだ。「こら佐々木、友達を売るなんて卑怯なことしちゃダメじゃない。

男なら友のために我が身を犠牲するくらいの心意気じゃなきゃ」と加奈に言われてしまう

「はい、僕が悪いです」即答

加奈にこう言われたからには木下の鞆攻撃を甘んじてうけるしかない。

「いいお返事です」

加奈の顔にはわざとらしいほどの笑顔。

退屈であろうと思っていた入所式。俺は考えが浅かった・・・でも誰だって「こういうとこの偉い人の話ってのはつまんねえくせにやたら長い」と思うだろ？俺じゃない、万国共通の認識のはずだ。だがしかし、ここの所長さんの話ときたら面白いのなんのって。

話の内容は普通に施設使用上の注意とか布団のたたみ方とかそんななんのに話し方が上手いからさつきから生徒一同爆笑の海。根っからのツッコミ気質な俺は律儀にツッコんでしまう。それが周りの笑いに拍車をかける。

「おい、そろそろツッコミやめろよ。笑いすぎて腹いてえ」

クロがこつちを振り向く。そうとう笑ったらしくちよつと涙目だ。「んなこと言ったって、あのおっさんがいちいちツッコミどころ満載なこと言っからしよないだろ」

まったくもって困ったおっさんだ。俺はなにかあったらツッコま

ずにはいられない性質なので今の俺を止めたけりや前で喋ってるおっさんを止めねばなんのだ。

『いやあ、この学校にはなかなか優秀なツツコミ役がいますねえ。

どうです、私とコンビ組みますか?』マイクを通した所長の声が響く生徒の爆笑に気をよくしたらしいおっさんは調子に乗って俺に話をふってきた。さすがに予想外だ…

「そつすねえ、とりあえず卒業までは待つてください」

ツツコミ気質なだけあってアドリブは得意だ。しかも満面の笑み。俺は作り笑いには自身があるのできつと接客業が向いているだろうと自負している。

『おやおや、断られてしまいました』

もちろんさほど残念そうではない。真剣に残念がられたら反応に困ってしまう。

『思わぬ相方(仮)のおかげで話が予定以上に盛り上がってしまいましたね。では、ここらへんで私の話はおしまいということ』

そう言う満足そうな顔でおっさんは引っ込んでいく。代わりにうちの学校の先生が出てきて今後の予定を説明した。事前に配られたしおりに載っていることなので適当に聞き流す。

暇なんで周りを見渡すとそう遠くないところに加奈がいた。

(おもしろかったよ)

加奈が口だけ動かして俺に伝える。

(あんくらい余裕だったの)

とは言ったものの加奈が気に入ってくれたのは嬉しかった。きつと今の俺は顔の筋肉が弛緩しきってるだろう…単純なもんだ。

うゝむ、俺ってもしかして・・・加奈にベタ惚れ?

〈第8章・入所式〉（後書き）

初めて後書きに手をつけます。

だいぶ間があいちゃいました。というのも事実を元に話を作っていたものですからだんだんとネタが尽きてきたのです。これから先も更新が遅くなるでしょうけども怒らないでくださいえ

最後に一言。「この小説、恋愛ってよりコメディじゃね？」と思い始める今日この頃・・・

〈第9章・行軍開始〉

「よい、スタートお」

なんて間抜けな掛け声でスタートしたのはありきたりなイベント、ウォークラリー。

あ、言い忘れてたけどこのゴテケンってのは基本的に班別行動になってるんだよ。各クラスで、3〜5人の班を、決め方はクラスの担任しただったけど。うちの担任はめんどくさがりらしく「好きなよおに決めたらいいんでないの？せつかくの行事なんだし」と言っただけでイヤホンでラジオを聴き始めた。絶対競馬だ（∴HR中なのに…）とまあ、こんな感じだったもんだから当然のごとく俺、クロ、M氏の三人が集まった。

「さあて、どういう作戦でいきますか？」

とりあえずクロとM氏に尋ねる。ちなみに周りからはほとんどの生徒がいなくなった。

それもそのはず、このウォークラリーは一種の『勝負』なのだ。

>>ルールを説明しよう！コースの各所に設置されたボードにはそれぞれ問題がかかれてる。まあ常識問題だったりなぞなぞだったり、はたまた授業の内容（予習・復習）だったりいろいろあるわけだ。それがわかったら事前に配布された答案用紙に答えを書く。最終的にゴールで採点してもらい、その合計点を競う、それだけ！！だったらわかりやすいのだが、これだけではつまらないだろう？だからここで時間の要素も含めちゃおうって魂胆だ。

一（定められた制限時間） - （ゴールした時間） - 〓減点！！

とまあ、これだけじゃわかりにくいね。ってか絶対値って通じるかな？ようはできるだけ決められた時間通りに帰ってこいってこと。

早すぎても遅すぎてもダメ。ちなみにスタート（ゴール）地点から遠いところにあるボードは点が高いよ、問題も難しいけど」

これが「事前に配布された答案用紙」とやらに書かれたルール説明。わかり易いんだかわかり難いんだかもわからん説明しやがつて…。ちなみにただ競えと言われて頑張れるほどガキじゃない。なんとこのオリエンテーション、景品がでるのだ。それもかなり豪華、という噂。まあ、みんながスタートと同時にいなくなったことも納得だ。今残ってるやつらも諦めてるとかノリ悪いとかじゃなく、配られた地図を見て作戦を練ってるのだ。

「うーん…近場でたくさん解くか、遠くで一発狙いか、ってところだね」

こういう誰でもわかってることをわざわざ言うのがM氏。

「あ？遠くでたくさん解きやすいだら」

で、こういう誰もやらないようなアホなことを言うのがクロ。

これにツツコむのが俺の役割なんだが、

「よし、それでいくか」

今日はノッてみる。

「おいおい、そこはツツコむとこだろ」

「そうだよ、佐々木君までバカになっちゃたの？」

それぞれが思い思いのリアクションをとる。

「ん？ちよつとまで、今のは俺がバカって意味にならないか？？」

「たまにや無茶もいいだら？それに勝算がないわけではない」

クロの文句はスルー。いくらなんでもそろそろ出なきゃならんからね。

「ま、歩きながら説明するよ。とりあえずはG8ってところに向かう」

G8ってのは地図上に縦横の線で区切られた区画で、現在地から東にまっすぐ、地図の右下の隅だ。

「い、い…伊藤博文」

「み？み…源頼朝。も」

暇つぶしの定番、『しりとりに興じる高校生3人。G8の問題が歴史物だったので自然とお題が歴史上の人物になってる。次はクロの番だ。』

「もぉ？…文部科学大臣！」

…うすうす気付いてはいたけど、この子はアホなのだろうか？

「文部科学大臣は歴史上の人物じゃないだろ」と言ってみる

「別にそういうルールがあるわけじゃないだろ？いいじゃんか」

クロにしてはまともな反論。そう、暗黙の了解というほどでもない、ただノリで続けてたのだから確かにクロが咎められる理由はない。

「ま、そりゃそうだな。でも『ン』で終わってるぞ」

「はやとちりしちゃダメだよ、佐々木君。文部科学大臣の後に名前が続くんだよ、ね？」

としなくてもいいフォローをM氏がする。ほんとマイペースなやつだなあ…

「そ、そうだよ、そうなんだよ。やだなあ佐々木はせっかちなあ、あからさまに安心したような顔をしてるから説得力皆無」

「ほう、んじや言ってみるよ、文部科学大臣」

「あれだよ、あの人。うーん……」

ほれみる、わかんねえじゃん。

「小坂憲次」M氏が小声で言う

「小坂憲次、だろ？」クロが勝ち誇った感じで言う

ちなみにM氏が教えたのはバレバレだが一人はバカ、一人は天然だからばれてないと思ってやがる。しょんねえ、見逃してやるか…

ちなみに順番は>クロ↓M氏↓俺くだ。

「『じ』『…』『し』でもいんだよね。」

「ああ」

「それじゃ、テーマ無視していいみたいだし…」

そう言って周りを見るM氏。足元で視線がとまる。

「白詰草」

足元に生えていたクローバーを手に取りM氏が言うと、クロが腑に落ちない顔をしている。

「白詰草？それはクローバーだろ？」

「和名だよ。むかし船で荷物を運ぶときにクッション剤としてクローバーを入れてたんだよ。クローバー自体そんときに日本に入ってきた。荷物に詰めてたってことから『白詰草』ってわけだ」

これはM氏も知らなかったらしい。二人して納得顔だ。

「こりやわりと有名な話だぜ？」

「知らねーもんは知らねーよ。な？」

「うん、やっぱ佐々木君はいろいろ知ってるねえ」

こんなことで感心されても…

「ま、無駄なことがほとんどだけだな」

そう、言い忘れてたけど、これが俺の作戦。

俺はわりといろんな無駄知識を持つてる。だから雑学系の問題は強い。

M氏は普通に頭いいから授業系の問題を解いてもらう。

クロは意外とと言うかさすがと言うか、なぞなぞとか間違え探しとかガキっぽいのが好きだ。

「つまり、問題の系統によって分担できるから大抵の問題が解ける。あとはまあ、地図の縮尺を考える限り大回りに外を回ればゴールにはちょうどいいくらいの時間になる。まあ、もし時間がきつかったとしても一番遠い問題5問も解けりや大丈夫だろ」

といった感じで作戦とも言えないが俺の考えを話したのはG8に向かう途中。今のところ順調に簡単なのを3問、難しいのを1問解いた。時間はまだ3分の1も経ってないし、難問は後半に密集している。

俺の作戦完璧♪

く第10章・遭遇く

歩き続けること数十分。現段階で解いた問題は9問、うち難しいのは4問といい感じに解けてる。途中1問だけわからない問題があったがメモだけとって次の目的地へと向かった。くだら考えるのは時間の無駄だしね。

「なあ、そろそろ休もうぜ」

俺の左からクロの提案。

「僕もそろそろ疲れたよ」

俺の右からM氏の賛同。

「んじゃ次の問題んとこで、考えつつ休憩ってことで」

俺の口から俺の承諾。

ウォークラリーが行われてるのはドが付くほどの田舎。滅多に車は通らないので横に3人広がっていてもなんの問題もない。

「今だいたい10問くらいだよな？」

「ああ、次がちょうど10問目だよ」

M氏の問いに答える。なるほど、そう考えたらキリがいい。休憩には持つて来いだな。

「んで、次までどんくらいさ？」

そう質問するクロに俺は地図を見せ、現在地を指差す。

「今いるのがここ。目的地がここ」

目的地を指差し、更にその指を前方へ向ける。餌を目の前に差し出された犬のようにクロの視線が前を向く。

「んですぐそこに見える十字路が、ここ」

もう一度、指を地図に戻す。俺の指が置かれたのは目的地の横1cmのところだった。

「なんだよすぐそこじゃねーか」

休憩が目の前だとわかると一気に元気を取り戻したクロは今にも

走り出しそうだ。

「おっしや、お先い」

… ホントに走り出したよ

「ガキか」軽く溜め息が出る

「お、クロは相変わらず元気だね」

そういうM氏は相変わらずのほほんとしてる。

走るクロの背中はあるという間に曲がり角に消えた。

「…（ニヤリ）」

「どうしたの？」

突然の俺のあくどい笑みにM氏はキョトンとしている。

「たまには、運動すつか」

そう言っただけはいきなり走り出した。

「あつ、ちよつと待ってよ」

慌てるM氏を置き去りにして角を曲がる。と、そこには

「やっぱり佐々木だった」

加奈がいた。一緒にいるのは定番の木下と、たぶん女バレの…名前
前は知らない女子。

「おう、こんなところでどうした？」

驚きを隠せないまま、とりあえず口を開く。

それにしてもなんてアホな質問だ。今は学年全体でウォークラリー
をしているんだ。地図上のどこに、誰がいようと、不思議ではない。

「ちよつと、休憩してたの」

と俺と加奈が話しているとクロが割り込んでくる。無粋な輩だ。

「ところで、問題はどこにあんだ？」

そうだった。話なら問題を解いてからでも遅くない。

「あそこだよ」

答えたのは聞きなれない声だった。声のするほうを見ると、道の
脇に広がる林の中を指差している女子がいる。名前がわからない…

「あ、あれか。ありがとう…え〜っと」

「千夏」

俺の心中を察してくれたらしく、本人が教えてくれる。苗字は？

「上の名前は？」クロが尋ねる

「苗字はあまり好きじゃないんだ。いいよ千夏で」

そう本人が言う。んじやしかたないな…

「ありがと、千夏さん」

と礼を言っただのは俺でもクロでもなく、さっきまで木下と話してたM氏だった。

「木下さんたちはあの問題わかんなかったんだって。だから一緒に考えないか、ってさ」

「へえ、難しいんだ？」当然、気になるとこだ

「う〜ん、難しいっていうか、3人とも苦手なジャンルだったのよ」

さて、その問題が俺ら3人にわかるかどうか・・・

つべこべ言っても仕方ないからみんな（6人）で問題を見る。

『食パンってなんで食パンって言う？』

ふむふむ、これが今回の問題か。雑学系は俺の担当だな。

「佐々木君、わかる？」

隣で問題を見ていたM氏が俺に聞く。

「…ああ、知ってるよ」わりと最近仕入れたネタだ

「こんな俺だって知ってるさ」

と、クロが自信満々で声を上げる。次に何を言うかはだいたい想像つく。

「んなもん、食べるパン↓食パンに決まってんじゃん」
「はあ…思わず溜め息。」

「…メロンパンは？アンパンは？！カレーパンは？！」

そう言っただんだんとクロに詰め寄る。どうでもいいが視界の端でうつむいてる木下はきつとクロと同じことを考えたんだろう。

「パンはパンでも食べられないパンはな〜んだ？の答えは食パン以外全部か？違うだろ」

「た…たしかに」

リアルにびつくりしている・・・こいつホントに高校生か？

「いいか？たしかに『食べるパンだから』ってのは正解だ。大事なのはその比較対象だろ」

俺が説明しだすとクロ以外のメンツも聞く態勢になったので俺も全体を見る。

「ま、簡単な話さ。昔は絵を描くとき、デッサンで使う消しゴム代わりの消しパンってのがあったんだ。これはわりと知ってるひとが多いだろうけどね。で、この消しパンと区別するために『食パン』としたわけだ」

説明終了。

「すごいね佐々木、よくそんなこと知ってるじゃん」

なんていいながら木下は拍手をしてる。そんなか？

「博識なんだ？」

との意見は千夏からのもの。

さつきから思ってたけど、いい声してんなあ。女子にしてはなかなかのハスキーボイスとクールな物言いがあいまってかなりカッコいい。

おっと、そんなことは今どうでもいいな。

「博識ってかまあ…暇だから、暇つぶしにいろいろネタを仕入れるんだよ」

「そうそう、コイツは根っからの暇人だから」

クロがちゃちゃいれる。悔しがってんのかもな。

「そりゃま、ラグビー部員に比べりゃな」

「へえ、あんたはラグビー部なんだ？」

千夏が興味を持ったらしい。せっかくだ…

「まま、立ち話もなんだし、そこらへんの自己紹介は休憩しながらで」

そう提案してM氏に目配せする。なんと準備のいいことにM氏はレジャーシート持参なのだ。

せっかく日陰になつてるので林の中でもわりと開けたところにシートを敷いて座る。正直俺もだいぶ疲れていたからちよつどいい。

「加奈たちはどんくらい休憩する？」

いちおう確認はしとかなきゃな。

女子3人が顔を見合わせる。

「んゝ、あとは戻るだけだから、けっこう大丈夫」

「そっか、俺らもそんなもんだし、一緒に戻るか」

せっかくだから彼女と行動したいと思ってしまう俺。

く第11章・到着したものく

とりあえず用意されたレジャーシートに座り、新顔がいるってことで自己紹介をした。

口にするのはもちろん当たり障りのないこと。新顔の千夏の番にはクロがやたらと気合をいれて質問してた。例えば

「彼氏いますか？いないなら俺とかどう??」

と聞いたクロの頭を俺がはたく。

「スリーサイズは？」

と聞いた時には裏拳でツツコミを。

「S?M?」

と聞いたときは鳩尾にいいパンチをくれてやった。

そして何より驚いたのは、俺とクロのやり取りを見て一通り笑うと千夏は全ての質問に律儀に答えたってことだ。あまり恥ずかしがるってことがないみたい。

「ちよつと、千夏。そんなこと答えなくていいんだよ」

と言った加奈に

「いいよ、減るもんじゃないでしょ」

とサラリと言つてのけたのだ。

思わず俺はこう思った。

(こいつ…かっこいい)

我ながらのん気だなあ…

一通り談笑も楽しんだ一行はレジャーシートを片付け出発するのにした。もちろん、女子がいることを考えて時間制限ギリギリを狙つての出発。俺にぬかりはないのさ。

研修をしているのが山のほうってこともあって4月の終わりにしては少し肌寒い。深呼吸をすると冷気を伴い澄んだ空気が肺を満たし

ていく。学校行事にははなかなか粋だな、なんて思う。

「空気がいいね」

案の定、ミスターのん気ことM氏が普段の三割り増しで間延びした声を発する。

「だな。こんだけ歩くと逆に清々しいよな」

偶然にもたった今同じことを考えてたので同意する。

「そうだね。でも足が棒みたい」

既に三時間近く歩いている。たしかに女子には辛いかもな。

「ま、苦しかったオリエンテーションもあと200m足らずでおしまいだよ」

そう、目の前の曲がり角の先にはゴールである青少年センターの入り口がある。

もちろん現時刻は設定された時刻の3分前。完璧すぎ♪

青少年センター内広場。すでにゴールしたグループがめいめい雑談なりなんなりしてる。だいたい学年の7割ってとこかな。

「みんなはえーなあ」

その状況を見ての第一声はクロ。

「ちようどはうちら含めて5グループくらいか、思ってたよりすくないね」

おっと、千夏にしては長い台詞だな。

「だね。これも佐々木のおかげつとことだね」

珍しく木下からの称賛。少なからずびっくりしてしまうなあ。

「おだてても何もでないぞ？」

とりあえずこういう場面での常套句を言ってみる。

「なによ、うちが滅多に人を褒めない人みたいじゃなか」

「そうだろ？な、M氏」

半ばムチャ振りだがM氏に同意を求める。

「うーん、そんなことないんじゃないかなあ」

くそつ、ダメか。ノリわりいな…

「ほらみる」

「んだよ、このバカップルどもめ」

いかにも「アホらし」ってな感じでその場にしゃがみこむ。下はアスファルトだし、ちょうど木陰だったからひとり、またひとりと腰を下ろす。

「そついやよあ、これの景品ってなんなんだろな」

たしかに、公表されてない。可能性があるだけに少し気になる。

「うゝん…グループ対抗だからお菓子とか、分けれるものじゃないかなあ」

との意見は加奈。理にかなってるな。

「俺は金がいい！」

やっぱりアホ発言はクロ。

「金はないだろうけど、図書券とかならあるかもね」

たしかに。千夏の冷静な判断。

景品かあ…事前に公表しなかったことからすると…

「宿題…とかだったりして」

なんとなくの思いつきで言ったことでみんなの顔が険しくなる。

あちゃゝ、言わないほうが良かったかな。

「まあ、そりやないだろうけどな。妥当なのは図書券だな」

フォローしてみたものの一抹の不安は拭いきれず…

次回、俺の予想が現実には？！！

く第12章・ろくでもねえく

「えゝ皆さんお疲れ様でした。えゝ、班のなかで親交を深めることはできましたか？えゝゝゝと…では結果発表を、えゝ、行いたいと思います」

全グループが無事に到着したのは俺らの到着から30分後だった。今は学年主任とやらが話しているのだが、

「この先生『えゝ』って言いすぎだよな」
後ろからクロが声をかけてくる。

ちなみにさつき雑談してた状態から整列せずに学年主任が話し始めたのでみんな近くにいます。

「よくいるよな、こういう人。でも『えゝ』って入れるのはなんかガキくさいよな」

一同、激しく同意。

「何回言うか数えなくなっちゃうよね」

木下が言う。確かにそうだけど、途中からじゃ微妙だな…

「今ので14回だよ」

「へっ？」

突然のM氏の発言に虚をつかれる。数えてたのか？

「お前…なかなか読めない野郎だな。不思議少年め」
なぜか無意味に警戒してしまう。

まあ、M氏の不思議さをいま説明しようとしても無理だろうから、それはまた次の機会に。

「えゝ、ではですね、1位の発表をしたいと思います。えゝ、ですが、えゝなんと！1位が同点で2グループいます」

ぬぁにいい？俺らがダントツ1位のはずが…どこのどいつだ？

思いがけない学年主任の発表に思わず耳を傾ける。

「えっと…A組、男子3グループ」

「おっしやゝゝゝ」「やったー」「うっしや」

クロ、M氏、俺の順に三者三様の喜び。ま、俺らが1位なのは当然だけどね。

で、問題の同着のグループは？

まさかとは思うが、加奈たちのグループなんて分かりやすいオチは…ないよな？

「えゝゝゝC組、女子1グループ」

なくはなかったらしい。確かに予感があったけど…分かり安すぎる。こんなんでいいのか？

「えゝ、では両グループは前に出てきてください」

俺たちまとまって座っていた6人は前に移動する。途中で座ってるクラスメイトからいろいろと声をかけられる。

「にしても、お前らと同点とはなあ」

隣を歩く加奈に話しかける。

「うん。千夏が作戦たててくれたのよ」

なるほど、頭良さそうな印象ははずれじゃなかったみたいだ。

「別にたいしたことないよ。ちよつと頭使えばすぐに思いつくことでしょ」

謙虚なんだか周りの大多数をバカにしてんだかわからん台詞だな…

まあ、同着なのは仕方ない。1位なのにはかわりはないし、表彰されますか。

「ところで、賞品でどうなるんだろうね？」

…確かに。M氏が言うまで考えもしなかったが、どうする気なんだか。

俺らがもう先生がたの近くまで来てるのもあってか、M氏の一言は学年主任の先生にも聞こえていたらしい。少し困った顔してる。「あゝそれなんだがね、えゝゝと…もともと賞品は1つしかないのじゃないけんで決めてもらいましょう」

じゃんけんで…ガキじゃねんだから。

「安心したまえ。じゃんけんに負けてもちやんと賞品は出す。ただし、少々違うものになるが」

だいぶ苦し紛れの一言だ。まあこの学年主任、けっこういい先生だからあまり困らせるのはかわいそうだな。

「分かりました。んじゃこっちのグループ代表はクロで」

「えっ!？」

急にふられたクロはさすがにびっくりしてる。

「大丈夫、別に負けたからって恨んだりしねえから」

「…わかったよ」

「こっちはうちが代表で」

向こうは木下が。こいつにやプレッシャーとかないんだろうな。

さて、学年全員が見守る中、両代表が睨み合い…

「「じゃん、けん、ぽん!」」

クロはグー。木下は………パー。

負けか。まあじゃんけんなんて運だし、しょんないな。宣言どおり俺はまったく気にしてないし、M氏にいたっては終始ニコニコしてるからよく分かん。

で、当の本人たちは…木下は飛び跳ねて喜んでる。クロはその場に膝を付き、砂を集めてる。

「お前は甲子園で負けた投手か!てかここ芝生だから砂あつまんねえから」

練りつくされたコントのごとく完璧な間でツツコミをいれる。会場爆笑。ま、会場ってかただの広場だけでも。

「え〜〜〜」

間延びした学年主任の声によって視線が集まる。

「ではですね、C組女子1グループの勝ちということで、え〜賞品

のほうですね」

加奈たちが姿勢を正し正面を向く。

「えゝ、こちらですね。図書券、一人1,000円分です」

「ゝおゝゝゝゝゝゝ」

みんな割りと食いついたなあ。図書券ってことは千夏の予想通りか…

「で、残念ながらじゃんけんに敗れたA組男子3グループの諸君！」

「ゝゝゝはいゝゝゝ」

先生が気合入れてっからこっちもなんとなくシャキッとした返事をしてしまった。

「えゝ、賞品として…」

ゴクリッ

「……………」

焦らすねえ…

「…宿題、ゴテケンの感想レポートを与えます！」

……………は？おいおい、そこまで予想通りにならんでいいよ。
「嘘ですよね？」

念のため、確認してみる。ホントは、なにくれるんだろう…

「私は冗談は言っても嘘は言いません。提出期限は来週月曜。A4
レポート用紙1枚以上は書くようにね」

俺らは三人で、その場に膝から崩れ落ちる。

ゝ第13章・同時多発エロゝ（前書き）

なんかありきたりなサブタイトルですいません。

最近は恋愛の要素が少なくなってるけど…いつか軌道修正しますm

（――）m

く第13章・同時多発エロく

ゴテケン〔名詞〕：入学したての1年生がクラス内での親交を深めるために学校が主催で行われる行事。『青少年センター』で行われる。二泊三日

そう、宿泊研修なのだ。つまりお泊り。俺たちは青春真っ盛り、思春期真っ盛りの高校生。

——つまりは発情期である。

考えることは勉強のことなんかよりピンク色の妄想が占める割合のほうが高い。

「よし、準備はいいか？ 今からミッション1について説明する」

「サー、イエス・サー」

ここはA組男子の宿泊棟。

「作戦名：はどうでもいいか。とりあえず、目的は分かっているな？」

「ですが隊長、下見などはしなくてよいのですか」

クラス1の大柄な男、バスケット部の内山の質問に対し、隊長——ノリノリで隊長役をかってでたのはクロだ——は鼻で笑う。

「すでにこの施設の見取り図は入手済み。下見などリスクの高いことはしない」

そう言ってクロは俺に合図を出す。一歩下がって控えていた俺はジャージのポケットから紙を取り出す。四つ折にされた見取り図を人の輪の真ん中に放る。

おおくく、みなが感心する。陸上部の原田なんか「一生ついて行きます、隊長！」なんて感じでクロをリスペクトしちゃってる……アホか？

「これをもとに作戦を立てる。なにか意見・質問は？」
そう問いかけられた面々は授業中にもなかなか拝めないほど真剣に頭を悩ませている。

数分間の（激しい）討論で出た意見をまとめるとこんな感じだ。

1・「やっぱり王道は男女の浴室を遮る壁のうえからだろ！」このセンター、できたのがだいぶ昔なので銭湯のように男女の浴室間の壁は天井までではないらしい
2・「ボイラー室に忍び込むのはどうだろう？男子の風呂から入ってボイラー室から覗けばきつとばれない」まあ、なかなかの安全策
3・「せつかく窓があるんだ、外から回るってのもありだろう？」
きつと風呂の窓は擦りガラスになってるか曇ってるかで中は見えな可能性が高いと思うが…黙っておく

で、隊長^{クロ}が出した結論はというと——「各員、己の信じる道を選べっ」だそうだ。

「作戦決行は一八三〇、第一波と第二波の交代の時間帯を狙って行う。万が一発見もしくは捕縛された場合、いかなる拷問を受けようと決して仲間を売るような行為はせぬように」

「……サー、イエス・サー……！」

やばい、かなりの結束力だ…

現在時刻は18時25分、作戦決行5分前。俺がいるのは…外でも浴室でもボイラー室でも、ましてや宿泊棟でもない。

——女子脱衣所の床下だ。

隣にはM氏。ここは2人だけの少数精鋭部隊。

なぜ宿泊棟での作戦会議で俺とM氏が発言をしなかったか。それは確実な覗きポイントを知っていたからだ。

バレー部にのみ代々受け継がれる秘密スポットらしく、俺は3日ほど前ここへ来るための方法が書かれたメモを渡された。

「まあ、クロも呼んでやつても良かったけどな」

「そだね。でもまあ、クロはクロで重大な任務だよ」

クロに課せられた重大な任務、それは『罔』。俺たちの覗きをより確実にするためにはしょうがない犠牲だ。

クロを犠牲にしてM氏を呼んだ理由はまあ単純で、彼女がいるから。正直…クラスメイトとはいえ大多数の野郎どもに自分の彼女の裸を拝むチャンスを与えるつもりは毛頭ない。

「それにしてもさ、床下の割りに綺麗だし、覗き穴も下からはしっかり見えるけど上からはばれない工夫してあるし、環境が整いすぎじゃない？」

M氏が言う通り、ここはとても環境が整っている。覗き穴どころか脱衣所の天井が鏡になってて上からの景色も見れるようになってる。さすがにおかしい

「それも先輩に聞いたただけだな、なんでもこここの建設当初の所長がとんでもないエロおやじだったって説が有力だったよ」

「ふ〜ん…なかなかいいもの作ったねえ」

—— ちなみにこの会話は床（俺らにとって天井）に顔をくつつけてる状況で交わされてる。

「にしてもよ、最近の女子は発育いいな…」

思わず生唾を飲んでしまう。

「あはは、佐々木君エロ〜い」

「うつせえなあ、自分だって人畜無害なツラしてちゃっかり覗いてんじゃないよ。このムツツリスケベ」

和気藹々と談笑しながらも決して穴の向こうに広がる樂園から目を逸らすことはない。健康な男子高校生なんだからこればかりはし

ようがない。

2人で談笑をしながら覗きを続けているとなにやら浴室のほうで騒がしくなってきた。

浴室のドアが開き女子が一斉に脱衣所に来た。

「覗きよ覗き！」「あれはたぶんA組の男子よ！」「外にいたわ、捕まえに行きましょう！」「もしかしたら他にもいるかもしれないわ、探しましょ」

どうやら外の連中がしくつたらしい。

「どうする？僕らもそろそろ引く？」

「うーん、まだ大丈夫だべ」

「そつかなあ。外つてことはクロもいるね」

「A組つてばれてたから顔隠したりしなかったんだろうな。アホめ」
「普通隠すよね」

——「ボイラー室にもいたよ！」「男湯の入り口で張り込むわよ！！」

「ボイラー室もか。見つかったつてことは、ちったあ見えただろうな」

「うん。まあ本望なんじゃない」

「ははは、M氏冷静だなあ」

「佐々木君こそ」

「ま、みな犠牲の上に俺らの作戦成功はあるのさ」

浴室に気を取られているからか脱衣所の女子は油断しまくってた。眼福、眼福」

「さて、そろそろ戻るか」

「だね。宿泊棟に戻ってアライ工作しなきゃね」

そうそう、パートナーにM氏を選んだのにはもう1つ理由があった。

クラスの女子を見た場合、照れたりしないようなポーカーフエイスが必要だった。

宿泊棟に戻った俺たちは何食わぬ顔で机に向かいゴテケン1日目のことをレポート用紙に記録する。オリエンテーションの賞品、もとい罰ゲームのアレだ。

そこにすっかり着替えも済んだ女子が訪れた。特にバスケット部の水川と水泳部の高田は最前列で…鬼と化している。

「佐々木、内のクラスの男子が女子風呂覗いてただけど、あんたらはどうなの？」

「素直に白状すれば半殺しのところを1/3殺しで許してあげるわ」

おいおい、物騒だな…

あまりのオーラに水川と高田の額に角が生えてるような錯覚をしてしまうではないか。

「あちゃー、冗談だと思ってほっといたけど…ホントに覗きに行っただんだな」

俺、苦笑い。

「僕たちは違うよ。彼女もいるし、みんなには悪いけど十分足りてるかな」

おやおやM氏、それはそれで目の前の鬼を怒らせてしまう発言ではないかい？

「そうよね、M氏君は覗きなんてしそにないし」

「佐々木は怪しいけど…新婚でラブラブだし、覗きなんかしないか」
鬼の角がちよっとだけ引っ込んだ。

「俺は疑うのかよ…しかも新婚で」

なにはともあれ、戦友の尊い犠牲によって、無事に俺の第1ミッ

シヨンは達成された。

く第14章・労いつて言葉を知ってるかい?く(前書き)

久しぶりの投稿。束の間の休息

「第14章・労いって言葉を知ってるかい？」

3人の女子による尋問も無事やりすごし、M氏と俺は平穏な時間を過ごしていた。

帰りがあまりに遅いクラスメイトたちを心配することなどまったくない様子で俺たちはトランプに興じていた。にしても2人しかないんじゃないやできるゲームも限られてくるから飽きるなあなんてことを思い始めた。

「みんな遅いねえ、どうしたんだろ？」

「さあ、今頃全員正座とかしてんじゃねえの」

無事帰還した俺たちにとつては笑い事だが、俺ら2人以外は全員覗きの容疑で捕まってしまったのでクラスとしては笑い事では済まない気もする。

「でもまあ、クロを筆頭にみんなが罔になってくれたからいい感じに逃げれたな」

女子がこの部屋に来たときは内心ビクビクしていたが結局不問となったし、概ね作戦通りにことは運ばれた。自分の才能が恐ろしい。「だね。まあ僕らにできるのはみんなの無事を祈ることくら——」

ドサドサドサッ

M氏の言葉を遮るように廊下で物音がした。なにか重たい荷物を床におろしたような…

「なんだ？」

俺とM氏は恐る恐る廊下の様子を確認する。するとそこには…

誰一人として例外なくパンツ一丁に剥かれ、からだの隅から隅まで余すところなくボロボロになったクラスメイトが積み重なっていた。

「……………」

思わず黙り込んでしまう。M氏の祈りは届かなかっただけ。この状況を見て無事だと言うならポケ。ンに『瀕死』なんてものはないだろう。

見ているも仕方がない…が、どうするのがベストだろうか？

「おい、大丈夫か？」

自分でも大丈夫だとは思わないがとりあえず声を掛けてみる。

「……………」

返事がない、ただの屍のようだ

なんてどこかで聞いたことが（むしろ見たことが）あるような一言が頭をよぎる…

「返事がない、ただの屍のようだ」

あ、M氏が言っちゃった。やっぱりこの状況じゃその台詞が出てくるよな。

「うう…」

おや、まだ生存者がいるらしい。

そいつは山の中腹あたりから顔を出してた。見覚えがある…そう、クロだった。

「クロ、大丈夫？」

M氏がクロを引っ張り出す。…頭を掴んで

「いであであ、首が&#25445;ける」

まあ上には男子高校生が5、6人のつかてるんだ、無理に引っ張れば相当痛いだろう。

「なんだクロ、元気じゃねえか」

さすがに冷たいかな？なんて思いつつもボロボロの友人に対してこんな台詞を吐ける自分。Sなのかなあ…

「元気じゃねえよ…湯煙で風呂は覗けねえし、見つかって追い回されるし、逃げてる最中蚊に刺されまくったし、捕まったら捕まった

でこんなにボコボコにされるし…」

見れなかったのか。それはさすがに同情したくなるな。

「そっかあ、大変だったねえ。とりあえず今日は布団しいてみんな休む？」

M氏の優しい一言。でもクロ以外は気絶しっぱなしだからこれを布団に運ぶのは俺らの仕事なんかなあ…

「ところで、お前たちはなんで無事なんだ？」

まあ当然の疑問だろう。クラスの男子19人中、無傷なのは俺とM氏の2人だけだからな…

「んなもん、覗かなかったからに決まってるだろ」

ここで正直に種明かしするほどバカでもなければいい子ちゃんでもない。なに、この手の質問に対する受け答えは十分に打ち合わせ済みだ。

「作戦会議には出席してたじゃねえか」

「そりやま、俺の意見でみんなに貢献できるなら、と思ってるな」

ムムム…、とクロは納得いかない様子。あと一息か

「第一、考えても見ろよ。言っちゃ悪いが俺もM氏も彼女いるんだぞ？覗く必要がないし、リスクが大きすぎる」

ここまで言っちゃえばクロも反論できまい。

「まあ、確かにそうだよな…」

よし、完璧。自分で自分の話術が恐ろしいよ。

そうこうしてる間に布団も敷き終えた。

「さてと——」

廊下に積みあがるほぼ全裸の野郎どもを見る。これを全部運ぶと思うと憂鬱だが…戦場での尊い犠牲は手厚く葬るのが礼儀であろう、と覚悟をすると

「明日に備えて早く寝よつか」

——え？M氏さん、なんて仰いました??

俺の顔を見て何を言いたいか悟ったのだろう、M氏が口を開く。

「布団は敷いてあげたし、みんなもそろそろ意識を取り戻すよ」

「……たしかにな。まあボロボロなのも自業自得だし」

もともとがヘタレでめんどくさがりで薄情でドが付くほどのSな俺はあっさりと先ほどの覚悟を捨てクラスメイトを見捨てる。

覚悟？なにそれ。尊い犠牲？無能なだけさ。礼儀？そんなんじや腹は膨らまねえぜ。

なんてことは思わないが、まあミスった奴が悪い…

「にしてもよ、ほぼ全裸の野郎どもがあんな積み重なってるとキモいな」

「うん。意識がないとはいえ男と素肌が接してて平気なみんなの気が知れないよ」

開き直ってしまったのか、俺とM氏は声高らかに笑いながら適当な布団に入る。

「——あんたら、鬼だよ」

クロはそれだけ言うのと力尽きたように眠ってしまった。

言わせてもらうが、俺よりM氏のほうが絶対エグいぞ

く第14・5章・報い?く(前書き)

今回はなんとなくM氏視点で書いてみました。意外と区別をつけるのが難しかったから短めで

く第14・5章・報い？く

さて、なにから話しましょうか。

みなさんご存じの通り、昨夜はクラスメイトがほぼ全員瀕死だったので旅行の定番、『恋愛話』も『枕投げ』もなかったんです。そのまま平和に夜が明けると思っていました。

「…あれ？」

鳥の鳴き声で目が覚める、なんてほど清々しい朝ではないけど誰に起こされるわけでもなく自然に起きたい朝だった…はずなのに……

「おいM氏、こりやいったいどんな状況だ？」

隣で横になっていた佐々木君も気が付いたらしい。

佐々木君に聞かれたことに答え今の僕らの状況を説明するなら

『すまき』

ってやつです。

なんでこんなことになっているか、考えるまでもなかった。

「よう、お二人さん。お目覚めかい？」

ドアをくぐってきたのはクロだった。得意気な口調から察するに僕らをすまきにしたのはクロみたい。

クロの後ろにはクラスメイトがぞろりとならんでる。みんな顔や腕のいたるところに絆創膏や湿布を貼っているのが痛々しかったよ……

「もう大丈夫なの？」

「ああ、ロマンのためなら男は何度でも立ち上がるのさ」

なんかかつこよさげなことを言ってるけど、ロマンとは覗きやなにやらのことだろうと思うと…微妙だよね。

「で、この状況を説明してくれないか？」

隣のすまき、もとい佐々木君が口を開いた。

「なにつてそりゃ、お前らだけ無傷なのは気に食わないだけさ」

――八つ当たりみたいだ。

僕は佐々木君の方を見る。向こうも同じことを考えたみたいで表情から言いたいことが読み取れる。

きつと

「俺らだけ無事に覗きいたのがバレたわけではなさそうだ」って思ってるだろうね。

ばれてないなら隠しとおさなきゃ…

「んじゃ僕らをどうするつもりなの？」

クロたちは顔を見合わせいかにも“何か企んです”って感じの顔で

「今頃着替えているであろう女子の部屋に放り込む！」

………それだけじゃ不可抗力としてあまり僕らは責められないんじゃないかなあ

「えゝ、ちよつと、勘弁してよお」

とえりあえず演技してみる。こんくらいで済むなら楽だしね。

「ふっふっふっ、もう遅い。これは決定事項なんだ」

嫌がる僕を見て気分がよくなったのかクロはノリノリでみんなに命令をしてる。

すると周りを囲んでいたうちの何人かがクロの支持で僕と佐々木君を持ち上げて運び始める。乗り物酔いするほうだからあまり揺らさないでほしいなあ…

さてさてお祭りかなんかじゃないかってノリで僕らは女子の部屋まで連れてこられた、というか運ばれてしまったよ。僕らを持っていく数人は全員域をあわせて身体を揺らし投げ込むための勢いを付けている。

クロが指を三本立てた手を頭上に上げる。

一本目がたたまれ、二本目がたたまれ…三本目がたたまれた。その瞬間、スタンバイしていた2人が戸を開ける。

ガラリとなんかそれっぽい音を立てて戸が開いたので中の女子はびっくりしてこっちを見ている。憎らしくもクロの読み通り、女子は着替え中。僕らを持っていた人たちが手を離れたんだろうね、その光景がだんだん近づいてくる…

ドサッ

布団にくるまれているとはいえあんな乱暴に投げられたら痛いよ…なんて思ってる暇もなく、いち早く状況を飲み込んだ女子が僕らに歩み寄る。顔を見上げると——木下さんだった。

「Mくん、なにしてるの？」

口調はいつもどおりだし、口は笑ってるけどなんか怖い。

「ええっと、そのお…」

やばいなあ、想像以上にきついことになりそうだ。

隣では僕と同じように彼女である加奈さんに尋問されてる佐々木君の姿がある。

さて、僕らは生きて帰れるだろうか…

「第15章・睡眠time」（前書き）

久々の投稿となりました。

前回から今回の間で読者数が1000人を超えました。嬉しい限りです。

今後もばちばち更新してくんでよろしくです

〔第15章・睡眠time〕

遠足でも修学旅行でも、帰りのバスとかつてのは寝てる奴が多いよな。まあみんな十分にはしゃいだ後だからしょうがないんだろうけども

「にしてもこのクラスは負傷者が多いな、男子が」

わざわざそんな事をマイクを使って言ってるのはうちの担任だ。そんな熱血つてわけでもないけどそれなりに生徒の気持ちを理解してくれている、つてのが1ヶ月間での印象。

「まあなんだ…そういうのも若いうちしかできないし気持ちはわかるが、警察の世話にならん程度にしとけよ？」

がははと笑いながら自分に割り当てられた席に座る。

「さて、今の担任の話をいつたいどれだけの奴が聞いてたやら…」

そう言つて俺は周りを見渡す。いちにいさんしいごあ……とりあえずたくさん。

かくいう俺はこういう時にはあまり寝ないことにしている。寝顔なんて人に見られて気持ちのいいものじゃないし、下手したら顔に落書きとかされるかもしれないし…もしかしたら寝ている間にクラス全員無人島に連れて行かれて「今から殺し合いをしてもらいます」とか言われたらと思うと安心して寝てられない。

まあ、最後のは冗談だとしてもあまり寝る気にならないのは事実。しかし周りは寝てる奴がこんな時にもやたらと元気な女子しかいない。

暇だ…

とその時ポケットの中で携帯が震えた。盛んに自己主張をしてくるのでポケットから出してやる。

サブディスプレイにはメールの送り主が表示されている。

「お、加奈か」

まあ俺の携帯がなるときはだいたい加奈からだ。それ以外は現在熟睡中のクロカM氏、もしくはこの時間は仕事中の両親ってところから加奈の確率が高いのは分かりきったことだった。にしても悲しい携帯だ…

そんなことで凹むほどネガティブでもないから俺は気にせず携帯を開く。

けっこう長いので割愛させていただくが内容は2日目の朝のこと。ゴテケン中は携帯は使えなかったなのであの件について触れるのは初めてということになる。

<―だからあれは不可抗力なんだって。てかすまき状態の人間が自分の意思で女子の部屋に飛び込める訳ないだろ?―>

そう、誰がどう考えても悪いのは放り込まれた俺たちではなく放り込んだ野郎どもだ。

また携帯が震える。どうでもいいが俺はこの振動がどうも慣れずに3回に1回くらいはビックリする。

<―でも見たんでしょ?(´^`´)―>

ぐうの音もでないってのはこのことか…確かに正直言えばいいもん見させてもらったとも思ってる。だって男の子だもん

<―できるだけ見ないようにしたし、その分はしっかりボコられたつもりさ―>

<―むう…―>

<―それに見合うだけの苦痛ってのはどんなもんかわかんけどもすまき状態で唯一自由な顔を殴る蹴るされたら十分だとは思いませんか?―>

メールが送信できたのを確認するとポケットに仕舞い周りを見る。相変わらずみんな寝てるな。さっきまで騒がしかった女子もいつの間にか静かになったし。

これだけ寝てる奴が多けりゃ俺も寝たって大丈夫だろうとも思う

が加奈からのメールが返ってこないのしばらく待つことにする。
することもないのでゴテケンを振り返ってみる。…なかなか激しい3日間だったな。

各クラスで自己紹介をしたり、オリエンテーションで歩き回ったり、二日目の夜は定番の枕投げもしたし、クラス対抗のプチ球技大会としてバスケもやった。1日目の例の事件もクラスの団結を深めるって意味では有意義だった。(バスケでの活躍でどうにか男女のなかは修復された)

あゝ、思い出したくないことも思い出しちゃった。そういや感想のレポート書かなきゃいけんいんだったなあ…

沈んでいる俺の気を逸らすかのように携帯が鳴る。

<ーま、佐々木の言うことにも一理あるかな。今回のことは次のデパート全額負担で許してあげようかな(へーへ)ー>

<ーへいへい、ありがとうござえます。でもあんま高いところは勘弁だぞ?ー>

<ーんじゃそうね…映画にしょ。ちょうど観たいのがあるんだー>

映画か…食事代含め2人分で5000円くらいか?ふむ…

<ーおーけえ、そんなくらいが妥当でしょ。いつ行く?ー>

デートの約束ができたあたりで睡魔が襲ってきた。さすがに疲れてるし、目的地である学校まであと30分ってとこだし、少々寝ることにした。

バスが学校に着いたらしい。周りの騒がしさで目が覚める。

「ぬあっ」

首が痛い…どうやら変な寝方をしたみたいだ。

「どうかしたの?」

隣に座っているクラスメイトが反応した。苗字はうる覚えだがたしか名前は裕樹だった気がする。ヒロキじゃなくてユウキだ、と自己紹介のときに主張していた。バスの座席は五十音順だから苗字は

サ行なんだろう。

網棚の手荷物を取ろうと思ってたらしいってことが少し浮いた腰から読み取れる。

「いや、なんでもねえ。ちょっと寝違えたみたいだ」
心配されるほどのことでもない。

「そつか。ずいぶんぐっすり寝てたもんな」

たしかに、首が痛いのを除けば身体の疲れがよくとれてる。
伸びをひとつしてからバスを降りる。

さて、これでゴテケンも終わりか。なんて思っているとキョロキョロと挙動不審ぎみに周りを見渡す加奈を見つける。

せっかくだし一緒に帰ろうか、なんて思い加奈に声を掛けようと近づく。するとちょうどこっちを向いた加奈と目が合う。

「佐々木、一緒に帰る」

そう言いながらこちらに来る。加奈さん、大声でそれはちよいとハズいです。

「ね、いいでしょ？それともなんか予定ある??」

ご主人様を見かけた子犬みたいな動きで近づいてきた加奈は――
「かった。（恥ずかしいので伏せます）」

「予定はないよ、むしろ俺も同じこと考えてた」

2人でゴテケン中であつたことを話しながらゆっくり帰る。

家に帰るまでがゴテケンです、なんて定番な台詞を俺は心の中で
言ってみる。

↓第16章・熱×夏×暑↓

俺が一番嫌いな季節、それは夏。俺は冬生まれで冬が好きだ。

今年の夏はなんか「梅雨こねーなあ」とか思ってたらいきなり暑くなった感じ。汗ばむのを堪えつつ、いつものメンツで昼飯を食う。

「私は夏ってけっこう好きだけど、佐々木は嫌い？」

「あー、俺は冬派だな。だって夏は暑いじゃん」

「アホだなあ、佐々木。暑いからこそ夏だろ」

「そうだよ。それに冬が寒いのかはいいの？」

M氏の質問に待ってましたとばかりに俺は答える。

「いい質問だ、M氏。いいか？すっげえ暑いとき、人は服を脱ぐだろ？」

「うん、そうね」と木下が頷く。こういう相槌がはいると話すのは嬉しかったりするよな。

「だがしかし、それはどんなに頑張っても『裸』になった段階で限界だ」

そして俺の力説は続く。

「いくら暑くても裸にはならんだろ？」

というクロの発言は無視。

「それに比べ、冬。寒かったら着ればいい。これには限界がない。よって冬のほうがいいのだ！」

……。同沈黙

「なんか無茶苦茶な理屈ね」

「うん」

満場一致で俺の意見は屁理屈に認定された。

と、いままで発言のなかった千夏（ゴテケン以来よく一緒にいるようになった）が口を開く。

「エアコン使えば？」

「……………」再び一同沈黙。

「それをいっちゃおしまいだろ……」

俺らはいつも屋上でメシを食ってる。なんでこんなクソ暑い時期に？と思うかもしれないけど、なにごとにも例外つてのはある。

屋上に上がる階段部分を作る日陰は夏の屋上において極上の避暑地だ。

「ふいー、いくら日陰でもあちいな」

わざわざ持参したうちわ（下敷き）でパタパタと扇ぐ。

「そろそろ行く？」

「おう、そうだな」

俺とM氏は弁当を片付け立ち上がる。

「今日も昼練？」

「ああ、3年の先輩たちも引退したし、気張らんとな」

うちの高校のバレー部はそんなに強くない。短い間だが世話になった3年は予選大会が始まったと思っただけに引退してしまい、今ではもう新チームでの練習に慣れてきたくらいだ。

「佐々木君はレギュラーになれそうだしね」

「へえー、やっぱ我らが中学の元キャプテンはすげえな」

「てかま、セッターはポジション争いが楽なんだよ。2年のセッターは半幽霊部員だしな」

なんともラッキーなことに、3年が抜けた後のセッター候補は俺を含め3人。しかも片方は幽霊部員、片方は田舎の中学出身で中学時代ろくな練習をしてこなかった1年。

「M氏も、この調子でいけばリベロで出れるだろ？」

「え、M君てバレー上手いの？」

M氏の隣で真面目に驚いてる木下。

「キノ……あんたそれでもM氏君の彼女？」

いいぞ加奈、もっと呆れてやれ。そーい、や加奈と千夏は女バレだから俺らのプレー見ることもあるのか…みつともないことはできないな。

「んじゃ行つてくらあ」

日陰ができるのはドアの反対側だから一回日向へ出なきゃならぬい。

「あー、あちい」

俺とM氏は屋上をあとにした。

「暑い暑い言つといてよく昼休みに練習しに行くよね」

その背中を見た加奈の言葉は俺には届かなかった。

第17章・責任重大な十代の若者

本日最高気温は30 を超えるらしい。そんな暑い日の午後――
「暑い……と、溶ける……」

まだ部活が始まってすらないのに俺は汗だく。ネットを張るために支柱を運ばにやなんのだが、これがまた重いなのって。

「体育館内は風吹かない限り蒸し風呂状態だもんねえ」

そう言いながらM氏は部屋から持ってきたネットをほどこしている。
はっ！こいつ、汗かいてねえ……M氏、侮りがたし。

「支柱もねー、こんなボロボロなんだしー、カーボンだかのー軽いやつにしてくんねーかねー」

さて新キャラ。この間延びした声の持ち主は同じバレー部1年の酒井。身長182cmでダントツの次期エース候補だ。

「なあ酒井よ。そのぐでーとした喋り方なんとかなんねえの？暑さに拍車がかかる」

「えー、それは八つ当たりってもんじゃーないのー？」

まあ確かに、あまりの暑さになんでもいいから苛立ちをぶつけた気分ではあるが……

「まあまあ佐々木君、落ち着こうよ。苛立つと余計暑く感じるよ」
M氏に諭されてしまった。って、いつものことか……

ぶつくさ言ったところで今が夏である以上はこの暑さはどうにもならないわけで。人生16年以上やってきてるからそんならいのことは学習している。うん、俺って大人

「こっちはいいーよー。佐々木ー、引っ張ってー」

酒井の間延びした声で思考から現実に戻ってくる。なんか必要以上
に悔しい……

が、怒りはネットにぶつける。怒りを力に変換しネットをきつく張る。そう、暑さへのどうしようもない苛立ちだろうがなんだろう

がボールなりなんなり、八つ当たりしても大丈夫なものに力としてぶつければ問題なっしんぐ。

「なっしんぐは古いよなあ…」思わず苦笑

「うん、確かにこの支柱はもう古いよね。錆だらけだし」

「へ？支柱」

振り向くとそこにはM氏。声に出てたか…はずっ

「あ、先輩だ。こんちゃーっす」

体育館に先輩が入ってくる。新部長の鈴木先輩、ポジションはセンター。

「あちゃー、もうネット張っちゃったか」

コート真ん中に張られてるネットを見て額をペチツとする先輩。鈴木先輩はこういうわざとらしい動作がけっこう好きらしい。

「え、なんかまずかったっすか？」

「いやな、今日は高さを220にして欲しかったんだわ」

220ってーと、女子の高さだな。なんかあんのかな？

「うちも女子も世代交代したたる？だからこれを機に体育館の使用日を決めなおそうかと思ってな。実戦経験を積むいいチャンスになるし試合形式で——勝ったほうが使用权を得る。ってな感じで月火水木金の5日分だから、5セット勝負」

「なるほど、だからネットの高さを女子に合わせるんすね」

「でもー、いくらうちのガッコはー女バレが強いからってー男子と女子じゃー実力差ありすぎじゃーないですかー？」

酒井の言うとおりだな。女子のネットに合わせれば女子はいつも通りプレイできるだろうけど、その分こっちはネットが低いから楽しだし…

「そ。それじゃ意味がないしつまらない。だから両チーム1年同士が試合をする」

「『えー！ー！ー！』」

あまりにびつくりしてしまつて酒井が自分のキャラを無視して普通に叫んでいるではないか！

「せ、先輩？それはいくらなんでも急なんじゃないでしょうか？」俺も思わずいつも以上に丁寧な敬語になつてしまつてるようだ。

「ん？急なこたあないさ。1年が試合するつてのは3、4日前には女バレの部長と決めてたからな」

うーん、初耳。

「でも鈴木先輩はそれを僕らに言つてないですよね？」

「…まあ、確かにそんな気はするな」

あはは、と陽気に笑う鈴木先輩。

「あのー、それをー僕らに言わなきゃー意味ないんじゃないですかー？」

お、酒井はいつの間にか落ち着きを取り戻したらしい。

と、そこで体育館に男には出すことのできない甲高い声が響いた。どうやら女子が来たらしい。

「ま、今更なに言つたところでどうしようもないんだ。女子も来たことだし、さっさとアップしろ」

「…ういす」「はい」「わかりましたー」

先輩の言つとおり、もう試合をするしか道はないのだ。覚悟を決めよう…

女子もアップをするのでコートの半分を使ってアップをする。俺らがランニング、ストレッチ、ダッシュと順調にアップを進める中、着々とチームメイトが集まつてくる。エース対角の山村、ライトアタッカー岡本、センターが高橋と天野。

体育館に入ってから全員がだいたい同じようなリアクションをとる。体育会系の部活では珍しくなく大声で挨拶をして体育館にはいつてくる。まず女子がいることに疑問を抱きながら奥に来る。（しかしついつい女子に目が行ってしまう悲しい男子高校生の性。）珍しくコートの隅でアップをする先輩に事情を聞く。驚くor焦る。

「おい、佐々木どうすんだよ？」

すでにキャッチボールに入ってる俺のそばに来て天野が尋ねる。

「どうするもこうするも…幸いにも各ポジションに経験者を入れられるし、どうにかなるだろ」

言いながら俺はネットの向こうに目をやる。加奈も千夏も、他の女バレの1年も落ち着いてアップをしている。どうやら向こうはちゃんと事前に連絡されていたらしい。…ま、それが普通か

「アップ済んだら半面で動きの確認だけしよっか」

ボールを持ったM氏が俺の後ろに立っていた。中学から一緒だったM氏の実力は分かっている。コイツがリベロに入ればレシーブは心配ないだろう。あとは俺があげて、打つ奴がいればどうにかなるか…。

「注意すんのは…女子特有の粘り強さと、千夏の高さだな」

部活を時間交代でやってるからたまに女子の練習を見ることがあるが、男子と比べても長身の千夏が放つスパイクは県内でもレベルの高いうちの女バレの中でも目立っている。

その他、敵にも味方にも懸念材料が多すぎる。

「ま、せっかくだし、勉強させてもらうか」

公式ではないが、これが俺の高校デビュー戦ってことになる

ゝ第18章・蛇に睨まれた蛙の子は蛙ゝ（前書き）

久しぶりの更新。長い夏休みに1度だけの更新。

↓第18章・蛇に睨まれた蛙の子は蛙↓

アップを済ませそれぞれ試合に出場するメンバーがエンドラインに整列する。

隣でバスケ部が練習している熱気もあつてか、体育館の中はとても暑くなっている。

「ではでは、そろそろ始めますか」

一人気楽な鈴木先輩が女バレのキャプテンに確認をする。そうやらこの2人が審判をするらしい。線審、得点板などは女バレが人員をだしてくれている。

——ピッ

主審を務める女バレのキャプテンが短く、そして力強く笛を吹く。それと同時に気合の入った声を出しセンターラインへと走る…女バレの1年。対する男バレの1年はいとうと…声はバラバラだし足並みも遅い、やる前から半ば諦めモードだ。

それもそのはず、毎年の目標が『緒戦突破』である男バレと『全国出場』である女バレとではだいぶ実力差があり、それにあつた力の持ち主が入学し、バレー部に入部するのだ。もちろん1年の実力差は言うまでもないほど。「月とスッポン」…とまでは言わないが、「地球と月」くらいリアルな差があるのだ。

ネットを挟んで向かい合う。

正面の相手とネット越しに握手。ポジションに着く前に集合して円陣を組む。

「おい、いいかおめえら——」

セッター、いわゆる司令塔のポジションである俺は鈴木先輩にゲームキャプテンを任された。よって、ゲームキャプテンとしてチームメイトに一言二言…

「相手が女子だからってなあ…握手するとき緊張してんじゃねえ」

ここでニヤツと笑って周りを見渡す。

すると、一瞬ポカンとした顔が一気に赤面。どうやら全員図星らしい。

「たしかに、みんなちよつとギクシャクしてたね」

さすがM氏、さりげなく周りを見ている。それにいいタイミングで合いの手を入れるあたり、伊達に長い付き合いじゃないな。

「だってまー、しょーがないらー」

照れる酒井。こいつは別になんも考えずの発言だろうが、周りになごむには十分だ。

少し、みんなの顔に余裕ができる。

「ここらじゃ有名な強豪校であるウチの女バレには、中学で名を馳せたようなんが集まっている。が、やはり男女の差はある。それにネットは女子の高さ。普段240のネットで作ってる俺らには楽なものだ」

みんな空気を呼んで真剣な顔になる。あんな硬くなっちゃイカンな…

「ま、せっかくのチャンスだ。女子に精一杯いいとこ見せようぜ」

相手のキャプテン（仮）は千夏だった。じゃんけんに買ったので俺はサーブ権をもらう。

「おっしや、んじや俺のサーブからだ」

滑り出しは大事だ、ここでのサーブミスは絶対に避けなきゃいけない。

左手でボールをあげる。いつも通り、悪くないトス。右手は振り切らずにボールに当たったとこで軽く引く感じに…よし、無回転！ネットを越えたボールは緩く曲がりながら落ちる。1球目という油断もあつてカレシープが崩れる。

がしかし、セッターの只尾が上手くボールの下にもぐりこみフォロースする。ボールは大きな弧を描きレフトへ…

サーブカットが崩れた段階でレフトに2枚のブロックがついていく。ライト岡本とセンター高橋がブロックに跳ぶ。フェイント処理のためにブロックの後ろにいる俺から千夏の姿が見えなくなる。

千夏が打ったボールが岡本の手当たりネットの向こうへ戻る。

しかしボールが落ちたのはコートの外。ゲームの1点目は女子にとられてしまった…

く第18章・蛇に睨まれた蛙の子は蛙く（後書き）

そろそろネタとか展開とかいろいろ困ってます。行き当たりばったりはよくない・・・

ゝ第19章・割愛(テヘッ)(ゝ(前書き)

お久しぶりです…

もう愛想尽かされて誰も見てくれないかも、ってくらい放置しちゃいました。

170日くらい経ってるらしいです…

正直、この後も更新する保証はありません。

でもたまに、足を運んで、更新されてたら見てみてくださいm(ゝ

ゝ)m

〈第19章・割愛（テヘツ）〉

バレーボールとは『極限の球技』である。

我々は地球上どこにいても、重力の影響を受け、もちろんボールは勝手に地面へ向かう。

が、バレーボールというスポーツはその重力に逆らわなければならないのだ。

などというナレーションが入ったが、気になる試合はというと…

- 1 試合目：女子
- 2 試合目：男子
- 3 試合目：男子
- 4 試合目：女子
- 5 試合目：女子

という結果に終わった。

簡単に解説すると、立ち上がりの悪さで1試合目を取られ、スタミナ不足で4試合目と5試合目を取られた。

実力は五分五分、いや、やはり性別の差でこちらのほうが若干上だったと思う。負け惜しみとかでなくね。

ただ、人員不足と経験不足が祟った。

「まあしゃあないさ。てか予想以上だ」

相変わらぬ軽い感じで鈴木先輩が言う。

が、練習をかけたの試合に負け越したのだ、責任を感じている1年はみんなうなだれている。

「すみませんでした…」

正直、謝ることしかできない。

しかし、試合終了後から謝ることしかしない俺達をみて鈴木先輩は呆れた顔をした。

「あのなあ…んじゃ聞くが、お前らは手抜きでもしたか？」

予想外な鈴木先輩の質問にエース対角の山村が慌てて答える。

「いえっ、自分は全力でプレイしましたっ」

そうなんだ。セッターってのは試合の繋ぎ役で、それゆえにコート上の全員をよく見る。

今日の試合は立ち上がりこそ悪かったが、みんながみんな頑張っていた。だからこそ、悔しい…

「なら謝るな」

…へ？

「1試合目、お前らは慣れない女子との試合に上手く気分が乗らず、力を出せず負けた」

その通りだった。女子相手だからと手を抜いたわけではないし、ましてや恥ずかしがったわけでもない。が、やはり違和感というか、ひっかかるものがあった。

「そこは少し不満が残るが、そのあとのプレイは全力だというのは見ていてわかった。

でだな、全力でやって負けたんだ。つまりあれが限界だった。それを、お前らが謝るったところでお前らの実力は変わらん。わかるか？」

「…はい…」

何人かの返事が重なる。みんな真剣に話を聞いている。

「つまり、俺がお前らに試合を託した時に結果は半分決まってたんだ」

「そう、だから全てはこいつが悪い」

そう言って鈴木先輩の後ろに仁王立ちしているのは、センターエースの佐々木先輩だ。（別に兄弟とかではないので悪しからず）

「おわつ、佐々木！いたの」 急に背後に現れた佐々木先輩に鈴木先輩は驚きを隠せない様子だ。

この佐々木先輩は副キャプテンで、身長は180cmくらいで体格がいい。顔はカッコイイけど寡黙でちよつとこわめ。

「いいか、一年。負けたのは仕方ない。だが、ここで努力できないやつは伸びん」

つまり、『この悔しさをバネにして』ってやつだ。

「そゆこつた。まあさっきの結果で月曜は女子の練習んなっちゃったし、なにより疲れただろ？今日はこれでおしまいだ」
たしかに、5試合もやったらクタクタだ。

「「「あつした！（ありがとうございました）」」」

いかにも体育会系、って感じのあいさつをして体育館を出る。

着替えなきゃならんので、みんな向かうは部室だ。

「残念だったね」M氏が声をかけてきた

「ま、当然の結果っちゃ当然の結果だろ」

そう、やはり集まった段階で目指すところが違うのだ。

「でも、負けっぱなしは趣味じゃないぜ？」

きつと今の俺みたいなのを『不敵な笑み』と言っのだろう。

「ありきたりな台詞だね」

M氏に言われてしまった…が確かにありきたりだな。

「あー、つかーれたーよー」

酒井の間延びした声が聞こえる。

「帰りにどっか寄るか？」

ついさっきまで同じコートに立っていた面々に提案する。

「俺マツクがいい」

「ぼくあ、よしぎゅー」

「コンビ二でいいっしょ？」

「サイゼリヤもありだろ」

…なんて勝手な奴らだ。

俺は妥当なところで、マスクに一票だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5173b/>

もしも俺が...

2010年10月16日10時07分発行